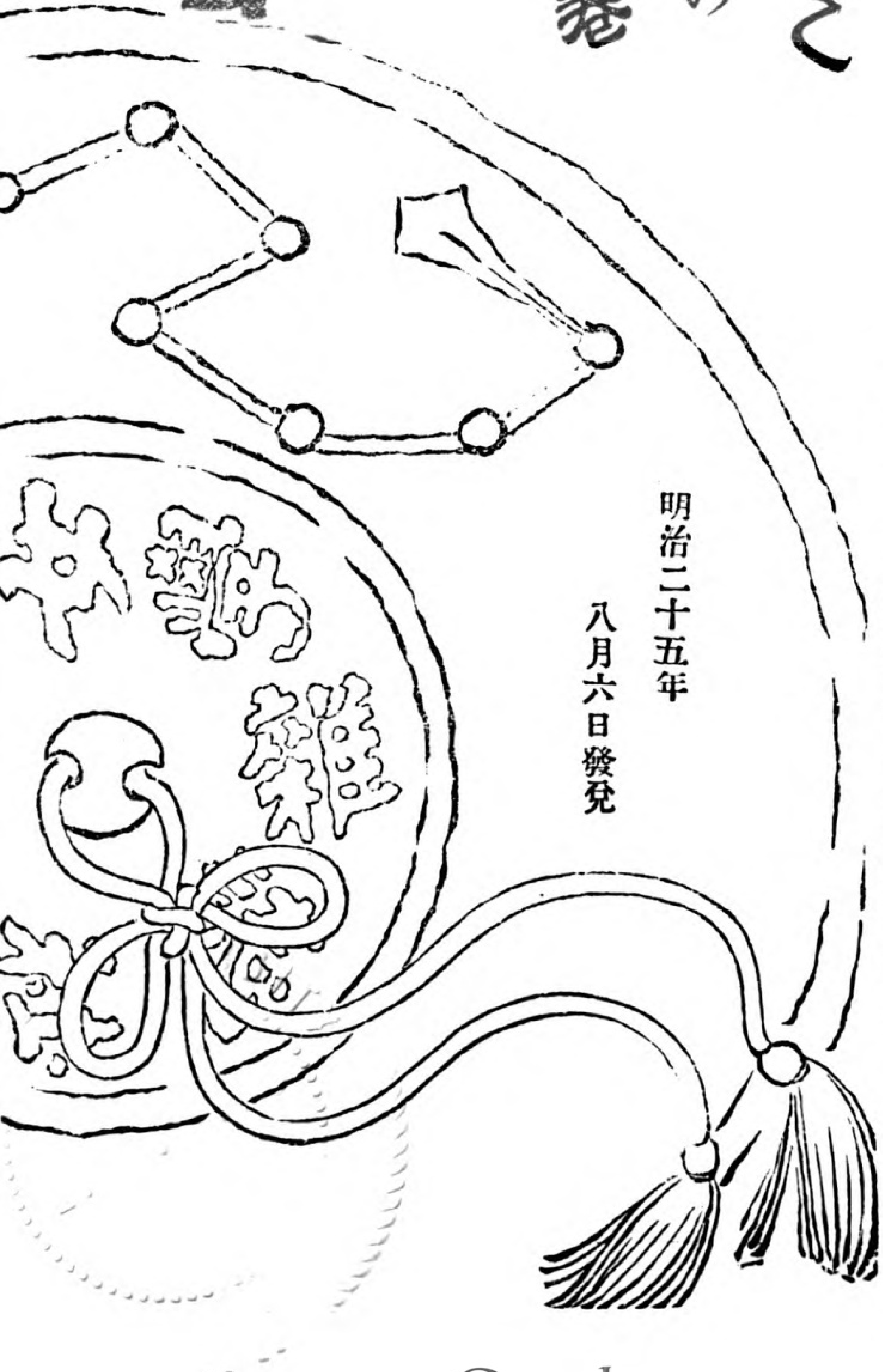
Aug. 1892
no. 324-2

女學雜誌

第三百二十四號

乙の巻



明治二十五年
八月六日發兌

注意

社説家庭は國家也の一篇は主婦諸君をして家政の樂しみを味はしむれば幸ひなり三十三年日本傳道の一篇はフルベツキ氏が長崎に渡來せし以來今の多くの大臣、今の大學惣理文部次官其他が當年の書生たりし時以來數多の人々に傳道したる事蹟を追懷し今昔を比べて演述ありし者也母さしてのグラッドストン夫人は今回英國の内閣を新組識すべき彼の巨老人が内君を母さして觀察し其の育兒齊家の經驗を歷々さして記載す我宿の花の續稿は若松しづ子が再び執筆し本號より又掲載するとさせり靜波万里の下に大潮あり變化なき日々の出來事を記載する下にホームの眞況を描寫するとあらんか。避暑の敎は避暑淸遊の人の爲めに衛生上心掛べき事件を網羅し其の健かにして淸く遊び玉はんを希ふ〇其他、子供に愛國心を起さしむる方。朝鮮國婦人の景況。家族主義女子教育の評。ジャパン、メールが明治女學校卒業式を評せし言葉など、皆な讀者の注意を惹に足ん

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 324. AUGUST 6th. 1892.

EDITORIAL:—The Home, a Small Kingdom.

BIOGRAPHY:—Mrs. Yasuoka Iku by Mrs. Sakurai Chika.

MISCELLANEOUS:—Dr. Verbeck as one of the First Evangelists in Japan: Summer Vacations and physical culture.

HOUSHOLD. Mrs. Gladstone as a Mother.

CHILDREN'S COLUMN:—Flower of the Family no. 6.

CRITICAL NOTES:—Mr. Mochidsuki's "Girls to be Educated for Homes."

CONTRIBUTED:—

TOPICS OF THE DAY.

本號（第三百廿四號）目次

●社說　家庭は國家なり

●史傳　故安岡いく子の傳（櫻井ちか子）

●雜錄　フルベツキ氏三十三年日本傳道追懷○避暑の教

●家政　母さしてのグラッドストン夫人

●兒籃　我宿の花（若松しづ子）

●批評　家族主義女子教育

●寄書　子供さ愛國心○コレラ病に付ての注意○文法上女子の解釋○談緒寸絲

前週（第三百廿四號）白表

●社說　天地之人

●論說　德川時代の平民的理想（透谷子）

●史傳　裏面の楠公（天知子）

●文藝　共角雜吟三十七句

●雜錄　澤庵禪師を觀る（天知子）○天地管見（六合學人）

●小說　夏草（一回）無名氏譯

●批評　まぼろし（透谷子）○千代田城大奥○日本大辭書○月露○活ける基督さ四福音○安心立命○婦人教育雜誌

●片々

前々週（第三百廿三號）赤表

●社說　南窓一筆（避暑の精粹。何人か出べき。夏休中の女學生）

●文藝　源氏明石の一段

●家政　衛生金玉（消化器の事。皮膚の事。齒、目、及び髮の事）○家政クラブの經歷（アバーデン女史）○アイスクリーム

●史傳　セキスピアが母○二條院讃岐の事

●雜錄　暑を避くる經驗（山下石翁）○螢狩（田邊花圃）○事物紀元○明治女學校卒業式の觀迎及び勸告○女子さ愛國心

●女報

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百廿四號 明治二十五年八月六日發兌

社説

家庭は一國なり

凡そ意を注ぎて綿密に思慮する人にとりては、事物の小さしと見ゆるが故をもて之を輕んずと云ふことなし。事物は皆な夫自身にて一の天地をつくる。仔細に吟味すれば、森羅万象之に備はり、一點一劃と云へども精かに其意義を存す。此ゆえに若し心して事物を研究するときは、一枚の木の葉、半片の花の瓣なりとも、至つて深く極めて大いなる眞理を含む。學者その一生を之に任するも、倘ほ其の妙理の悉くしがたきものありと歎ず。

進化論にて名高き英吉利の大學者チャールス、ダルヰンは、蚯蚓の性質、行狀を研窮するに、凡そ四十年を懸けたり。彼の蠢々蜒々として何の譯もなくはひまわり、土を食つて土を吐き、一生を塵芥の中に埋沒する可憐の一小虫は、それ何の因縁ありて、全世界を聳かし動かしたる大學者の四十年を費やさしむる乎。高きは天なり、低きは谷なり、廣きは大洋なり、もの、此外に大いなるはなしなど妄想する人の心には、右の問に對して不審に堪へざる思ひあるべし。そは、形の大きなるのみを以て物の大なるものとなすによる。然れど、惟みよ、形の大きなるが故に重んずと云はゞ、牛を追ふ主人は其牛に及ばず、眞珠をさぐるの舟はその眞珠に優る。女學雜誌此の一片の紙は讀者諸君が烱たる其の御眼にも勝るゝなり。何んぞさる理わりのあるべき。

此故に、獨逸の學者は、豆一粒の研窮を終生の專門として、豆學者と稱ふるものあり。我國にても近頃は追々と其趣むきを生じ、或人は鼈の研究に八九年を費やし、或人は蛙の研究に七八年を費やし、又或人は金魚の尾の鰭を研究せんとて、十年來倘ほ其穿鑿を中止せざるあり。

されば、心なき身には、天は一葉の幕の如く、地は一枚の莚に似、夜の星は銀の留針の如く、山上の森林は一日を壽の菌に同じからん、至つて淡泊に見えて、其奥妙の深理を空に看過すべし。然れども、思慮ある精密なる觀察者にとりては、

一品一物も巨漠なる天地の心地し、之を考がえて彌よ深く、之をさぐりてます／＼遠く、之を仰ひで彌や更に高きを覺ゆるの感あるべし。かゝる人こそ幸はひなれ。其の人の天地は地積を廣ろめたり、其の人の一生は壽命を長うしたり、其人の生涯は一層の意味を現はしたり。

以上説き來りたる理由を基ひとして、吾黨は婦女子諸君に其家庭の研究の面白きとを勸告すべし。

もし一方より考ふれば、家内の仕事ほど變化少なく、意味の淺々しきものはあらざるべし。薪を折りて火を燃やし、引窓を開ひて煙を立たせ、膳を列べて食品を載せ、食つて而して洗ひ拭ふ、子供の泣くを靜め、下婢の晝眠りを起こし、下男の横着を叱る、玄關に主人を送りて、また玄關に主人を迎へ茶盆に客を迎へて、下駄をそろへに客を送る、好氣天には洗濯し、雨滴々の日和に縫ひ物す、日々閾を超えずして、日々家内に奔走す。何んぞ其爲すとの毎日／＼同樣にして、而も單調子を極むるや。老女のをだまきを繰返すが如く、白鼠の小車をまはすが如し。

然し乍ら、かゝる見解は、物の表面を觀たるのみにて、未だ其眞相を察せざる人の感覺に出づ、若し、研窮の思慮、進步の趣味を以て事物に當らずんば、何等の事務か無意義單調子に陷いらざる可き。日は東に出でて西に入り、水は流れて復た天にかへる、日々同じきが如しと雖ども、仔細に察する人の眼こには、皆な新らしからずと云ふとなし。家庭朝々暮々の業、何んぞ亦た之に異ならんや。

夫れ、家庭は幾千年來日本婦人の戰場となせしところ也。或人は玆に凱歌を奏し大ひなる勝利を得しとあり、其勳功さま／＼の家政法となりて遺り今の主婦は其秘傳を傳ふ。竈の作り方、物の煮樣、皆な幾多の苦心發明を經て今日に至れりと知るべし。又或人は玆に打死したり、其屍、多くの難問題となりて今に尚ほ歷々存し、後の今日の人を招きて其の妄執をはらせよと招く。

思ふに、家庭は、一般婦人が業を遂げ功を立つ可きの戰場なり、奮つて之に臨み、勇を鼓して之に當る、極めて爽快の事にあらずや。

蓋し古來の主婦すでに幾多の發明を爲しぬ。然れど、十九世紀の文明を應用し、家具を經濟の許す限り改良し、食物を衞

生の法に則とりて取捨し、家政を開化文明の風に行ひ得るべけ行ひ、政治上に立憲一新の變化ありしが如く、家の内にも亦た一變革を仕遂ぐるとは、明治年代の今日の婦人の手に托せらる。諸君之に任せざるを得ず。

一の家庭を見て小さしとすると勿れ、其面積は小さしとも、豆よりは大なり。研窮の材料少なしとせんや。若し心して之に注意すれば、家庭は是れ一國なり、之を脩むるは一の政治なり、主婦諸君は即はち其の惣理大臣なり。

三田の福澤翁前年屢ば人に語りて云ふ、もし吾が台所を能く管理する人あらば、政府にすゝめて二百五十圓(大書記官)の官員となさんと。これ實に智者の言なり。一家の經濟を能く料理する人あらば、亦た一國の經濟をも能く整のふべし。物は注意思慮によりて決す、形の大小によるにはあらず。故に太田錦城は言へり、一家を能く掃除せざる人は、天下を掃除すると能はずと。吾黨は近代の政治家として佐久間象山先生を推す、試みに彼人の家庭を見るべし、肅々として一品一物も其所を得ざるとあらず、當々として一婢一僕も其地を得ざるとあらず、先生すでに之を一家に施こしたり、故に亦た之を天下に施こすとを得るを證す。人は皆なかくありたきものなれ、一家に借錢多くして國家は富を殖すと云ふ經濟家は信ず可らず。

此理により主婦諸君は、家庭を脩むるを以て小さきとと思ふ勿れ。小きは其心掛にあり。もし放擲して注意せざれば、家庭は實に狹し、(天下と云へども去る人には實に狹し)、もし之を重んずれば、くりかへし〳〵て言ふべし、家庭は一の天地なり、一の國家なり。

人は自から輕んずるより輕きはなし、又自から重んずるより重きはなし。諸の主婦諸君、諸君は斷えて自から輕んずるとなかれ。深く自重せよ。諸君は一國の女王にあらずや、諸君が支配する天地の惣理大臣にあらずや。若し念して夜々新らしき注意を爲さば、日々茲に新らしき事實あり、家庭の内、諸君が爲すべき新らしき事業漠々として倘廣し倘多し。試みに諸君が心を奮ひ、試みに諸君が手を揮へ、茲に乍ち爽快なる新らしき泉涌かん、其流混々として淸鮮、一家の人皆な之を飲みて樂しまん、而して其祝福を與ふるの天使は、主婦たる諸君にはあらずや。

史傳

故安岡いく子の傳

櫻井ちか子

さりにしひとの　こしかたを
かへりみすれば　うつせみの
もぬけのからと　なりしかど
こゝろはいかで　きえぬべき

落日の光しづかにさしくる窓のもとにすぎこしかたのくさ〴〵なることを思ひつゞけしが、いつもの如く故友いく子のことに思ひいたりぬ。

いく子は年いまだ若くして眠につきしかば今日にては彼れが如何なる婦人にてありしかは勿論其名をだに知る人少なからんも、我は彼れと十年の長き交りあるがうへに、其いまはをさへ見とゞけたるがゆへ、彼れの温和なる容貌、嚴肅なる風采、ならびに其愛にとみたる心情など今もなほ忘れ得ずして、我心が世事の繁忙よりまぬがれたる時々我心のうちに常にうかみ來るあり。

我れはいく子のことが我心にうかみ來るを樂みとせり、そは之れによりて彼れに面晤するの心地せられ、又其容貌、風采、心情を思ひ見ることによりて我身に益せらるゝことの多ければなり。我れは今、我身一人に彼れを思念することのみを以て我心に滿ちたり得ずなりしかば、いでや拙き文ばしつゞりて、いまだ彼れを知らざる世の多くの人々に示し、彼れが其短き生涯のあひだも、如何ばかり神と人とのために身を盡したるかを知らしめんとて、筆とることを思ひさだめぬ。

いく子は高知縣のむまれにして、父を安岡百樹氏といふ、百樹氏維新の改變のゝち早く官途につきて東京に住居せしかば、いく子も父にしたがひて東京にいで、最初芳英社に入りて英學を修め後轉じて築地六番の女學校に入學して學に勵みたり、彼れ此學校にあるの日キリスト敎をまなび、救主を信じて其信甚だあつかりき。然るにいく子の父は熱心なる神道家なりしにより、其娘がキリストの信者となりしことを甚だ悦ばず、直ちに此女學校を退學せしめ、女子師範學校に入學せしめて、其心を變ぜしめんと企てたりしが、いく子は唯々

其命に應じて女子師範學校に入學せしも、彼れの信念は之れがために少しも變ぜられざるのみにあらず、却てます／＼篤く當時此校に在る百余名といふ多數の生徒のうちに未だ一人の信者なき中而かも信者たるものを輕視嘲笑するの中にたちて少しも恐れ臆する色なく堅く其主義をまもりて動かず、救の道の必要なることわりを說き、病あるもの或は憂あるものをなぐさめしむることを務め尙毎安息日ごとに生徒のうちの數人を我女學校に設けたる安息日學校に導き來りて怠ることあかりき。

我れは此安息日といふことにつひて、いくらか其平生の行爲が如何に正しかりしかの一斑を示し得るなり。實に彼れが安息日をまもることの嚴なる、學生の常として其一秒をもをしむ試驗前といへども、之れを欠くことなくして堅くまもり我に來りし三年の長き日もまことに一日の如くなりき。

彼れは又其寄宿舍のうちにて毎周間一回有志者をあつめて祈禱會を開くことを怠らざりしが、彼れの熱心ある此働きは實に天父之れにこたへたまひて、彼れの導きしものゝうちにて數人終に救はるゝことを得たり、我れは此數人のうちにてかの本多庸一君の夫人をも指名するを得るなり。

かくていく子は女子師範學校にての螢雪の勞むなしからず明治十四年の春を以て卒業したりしが彼れは此のうちの働き場所として北海道を撰定したりき。蓋し當時北海道は內地より移住するもの多く而して其移住民の多數は着實なる心を欠きたる者なりしにより、從て其身とともに多くの惡風を携へ來り、醜躰北海道をおほはんとし殊に女子の風儀に至ては言ふべからざる有樣なりしにより、いく子之れを聞ひて大ひになげき、彼地に渡航して女風の改良に力を盡さんこと是れ我天職なりとて、心を決して北海道に赴けり是れおなじ年の五月のことなりき。

彼れの此行に熱心なりしことは下の一事にたいしても知らる。彼れ北海道に渡らんがために橫濱にいで、滊船某丸に乘り込まんとせし際、端艇客おほく爲めにいく子は押されて海中に落ちたり。時恰も夜の一時頃にて殊に暗夜なりしかば、實に其のあやふきこといはん方なかりしも、彼れは幸に游泳の術を心得たりしにより洋傘をうきとして游泳し溺れざることを得たりいく子は發程すでに此事變にあひたりしも之れ

によりて志を挫かることなく、其夜其濕船に投じて出帆したり。まことに彼れは超絶したる勇氣と熱心とをもてる女女丈夫にあらずや。

いく子は函館に着したるのち該地にて女子師範學校に教授し、徐ろに彼れの當初の希望につい〻圖る所ありしが、彼自身の運命は圖られずして、其年の九月即ち着後僅かに五ヶ月といふ少しばかりの時日を圖りたるのみなるに、彼れは俄かに肺炎衝にかゝり、(此間も彼れは病を忘れて校務をとれり)臥床すること一週間にして彼れが　生健康にほこりたる身躰も生活を停止し、函館浦山の土は將來其地に恩惠を施すべき筈なりし人(我れは彼れにして若しながらへたらんには必ずしかありしと信ず)の軀を無量の憾を以て呑み盡くせり、彼れの此時に達せし齢漸く廿三許。

我思ふに彼れの此あまり早き永眠は函館に名高き五六月の不順の氣候と先きに夜中海に落ちたりしことが其因をなせるならんと蓋し彼れは其着後直ちに不快を感じ、其後常に全愈したることを見しことなく、且つ身躰も衰弱の傾ありしを見しによりてなり、果して然らんにはいく子は實に北海道のために身を犠牲に供せしことと我れは信ずるなり。そは兎も角もいく子の此訃音は朝野の彼れを知れる人の嘆きを起し時の函館縣令たりし時任爲全氏の如きは、いく子の病氣わつきを聞くや、心いたく之れを悲しみ特に官醫數人を派して厚き手當をほどこされたりき。

我は我良人と共に、始終彼れの枕邊にありしを以て、其最早望みなきを見るや痛哭なすところを知らざりき。我れはいく子の最終の枕邊にありて、其病のあらたまるを見、心そゞろにいく子が身獨り遠く其親しき父母弟妹をはなれたる異境に終るの心情如何にやと又遠き空より其娘の或は其姉の死を聞く彼れの父母弟妹の心の遺憾如何あらんなど〻思ひつゞけ此事の人ごとならぬ我身のうへの如く感ぜられていま彼れの終を見んとする其悲みにかなしみを加へつゝ、いく子にむかひて、我は思ふ君の病篤く最早望なきが如し何か遺言せんとせば語りたまへ我れ之れを聞かんと、彼れは病を忍びて答ふるやう、人生は一度死するを常とすれば、今我死するも我に於て何の恐るゝことなきも、只我心にいま死することを遺憾とするは我父母弟妹を導ひて救主の救に入れともに天の國に

於て樂まんとの宿願を果すを得ざりしことなり、然れども今は天父の召をうくるによりて我は行かんも、若し君にして時を得たまはば我國に行きて我家族及我國人を導ひて天の國に入れよと、噫此問答は慰められ、勵まさるゝ者は、(慰むべき筈の)我にして、(慰めらるべき筈の)彼れなりしかり、然り彼れは實に救主を頼みて彼自身に於て心安かりしなり、而してなほ他人をも安からしめんと望みしなり、如何に彼れの心の淸さよ、うつくしさよ。

天の父の旨は深くして圖り難く、其後父は我等を導きて、いく子の望の如く(いく子の望みしにも拘はらず、我等は北海道を去らん望みはなかりしなり、然るに)高知にいたらしめ、該地に傳道することゝなしたまひぬ、我等の高知に居りしは長からざりしも、爾來高知の教會は盛大に赴きしにより、若し之れをいく子に見せしめば、彼れの喜び如何なりしならんに、然れども此有樣に立至りしも彼れの熱禱其一因をなすとし思はゞ、彼れは其自からの希望を達したるものといはざるべからず。

今や我れは此篇を終らんとするにのぞみ、いく子の犧牲の一を、而かも其最も大なるものを漏したるを補はざるべからず、いく子は其性惡を憎むこと甚だしく、語の少しく卑猥に渉りしときにも、彼れは身振ひをなしたり、然れども、彼れは他人の惡事を擧げて喋々することを忌み、朋友相あつまりて談話するの際、語他人の惡事に及べば、彼れは忽ち口を閉ざして之れに和することをせず、却て憂ふるの樣を顯はせり。我れはいく子と交る十年の間彼れの口より未だ一たびも他人の惡事を指摘するを聞かざりし、而して又彼れは他人の美德を稱揚し其風をしたふことに、躊躇せざりき。彼れは實に得難き婦人にてありしかな、我れ之れを學ばんとして得ず、得ざれども之れを學ばんことを欲して之れを勉む。」

おぼろに見たる　こひつじを　まのあたりみて　わがともは
あまつ津かひと　もろともに　エホバのあいを　うたふべし

因に曰く、我れ此小傳中に於ていく子につひて漏したることも多からんと思へば、世の彼れに交りて知りたる人は、我れに次ひで文を此處によせたまはんことをねがふ。

雜錄

フルベッキ氏の舊懷。

修謙子

たのしげなる和氣はその眉宇の間に溢れて眞率なる風采に君子の德行を兼ねたるものはフルベッキ氏なり氏の三十年來わが國にとゞまりてよく邦語に熟練するは皆人の知るところなるが是度箱根山上夏期學校の講堂に於て我國傳道初期の有樣につき舊懷を述べられたり其辨舌のさわやかなる其素振のたくみなる聞くものをして掌を拊するに暇なからしむ今こゝにその有益なるところ〱を記して讀者の爲に割愛のこゝろを寄す。元の談話には現今の諸大臣當時の諸壯士に關する最も面白き節多かりしが憚かるとありとの由ゆへ、玆には皆省くと云ふ。

天職

はじめ米國なる傳道會社より三人の傳道師を我國に遣さむとするや蘭語の我國に行はるゝ由聞えたれば內一人は是非とも蘭語に通ずるものならざるべからずといへることになり當時フルベッキ氏は神學校にあり既に卒業間近の身にして殊に蘭語に通じたれば是人こそは日本傳道師の一人に適當なるべしとてその意をフルベッキ氏に通じたり氏は神學校にありて未だ後來の方針も定めざる折なれば之を聞て大によろこび直に意を決して我國に來りしことゝはなりぬ氏は自ら日本に傳道せんことを定めしものにあらずあだかも天命の導くところとなりて我國に來ることゝなりたるもの故今にいたる迄これを思ふごとに神思快然たるを覺ゆといへり。

單語談

三人の傳道師が無邊なる神恩を受けて先づ我國に到着せしは千八百五十九年なり今日ならば左程にはかゝるまじきも其頃のことゝて喜望峯印度洋などを越え我國に着したるは凡そ六ヶ月目にして二人は横濱にフルベッキ氏は直に長崎を向けて出發したりマウンテンは山ハウスは家などゝ船中にありて稍單語を學び得たりしかば長崎に着したる當時人に語るには單語を交へたる手眞似にして氏自ら當時の傳道をば單語ばなしなりしといへり。

大德寺

當時は天下騷然物情競々として士人といへども多くはその藩

あるを知りその國あるを知るもの少なく外人を夷狄の如くに思ひてこれを刄傷するはまさに國に盡すの一分なりと思はれたり氏はよくこの誤想をしりたれば敢てその志を酌みてみだりに攘夷家を卻けず其始めて長崎に來り大德寺に宿するや一人にても我國人の來り見んとするものあれば食事の中といへども或は哺を吐き或はこれを延ばし置きて親切にこれに接せざることあらざりしといへり殊に面白きは渠儕攘夷家の氏の門を叩きてその風采に接し始めて外國人なるものは如何なるものなるやを見數十分の内には全くその攘夷の精神を忘れて門を出るの語を聞けば渠も一個の人なりと獨語けるにありしとぞ是等攘夷家のうちには不思議なる顏色にて幾度か氏の手を握り偖々鬼にはあらざりし同じく人間の仲間なりしかゼントルメンなりしかと諸種の疑念一時に晴れしがごときをも見受けたることと屢々ありしといふ。

支那譯聖書

諸藩士フルベッキ氏の大德寺內にあるを聞き傳へてしきりに來り見るもの多かりし氏は支那譯聖書を取寄せ置きたれば某といふもの來りし折卓上に置きて之を示せしにその人手眞似にて首を切らるゝ樣を示し匆々に謝し去りしといへり支那譯聖書及び天道遡源などの書にて氏の賣捌又は贈與したるはその數を知らずといへり。

鐵扇

あるとき二人の藩士とも覺しきもの氏の寄寓を訪れ來り知己の士人は皆な大刀を手にして之を室の一隅に差置き脇差のみを腰にして應對するを例としたるに此二人は何故か大刀を腰の間に橫へて氏の室に入り來れり偖浪人攘夷家なるべしと鑑定しかゝる時には先づぬからぬ顏して對應するに如かず若し少しにても恐怖の色を示さば或はその乘ずるところとなるべしと分別し何げなく平然として席を與へたり暫時相ともに談話したるに折しも平生辱知の二士また氏を訪るゝに遇ふ如何にしけむ先の二人は今入來る二士を見て甚だ驚きしものゝ如く早々席を立ちて庭を見るの樣をなせり因りて氏は試に卓上に置ける鐵扇をとりたるに其重さには一驚をなしかゝるものゝ一擊にだに遇はゞ我頭部もたまるべきかと思ひしとぞ。

物情騷然

當時浪人といへるもの四方に橫行して物情はなはだ騷然たり

幕吏某なるもの氏に注意して戸外に出ることなからしむ凡そ一週の間は氏もその命にしたがひて寓舍にのみ引籠りしが左りとては健康の爲にもよからじ今日は是非とも外出いたしたしもし二人の衞士にて危險と存ぜらるゝならば今二三人も加へられよといひ遣したるに心よく承諾し遂に數人の衞士を前後にして氏は戸外に逍遙を試みんとしたり然るに數町ならずして身は虎口にあるがごとく時としては三人の武者振ッたるもの左右と中央とに分れて氏が行かんとする途を塞ぎ何か喧嘩の種を買はんとするものありしを氏は此處ぞと例のぬからぬ顏にて恰も知らざる者の如く靜かにその間を行き過ぎたりしが斯ることと屢々なりきといふ。

初代傳道

これら三人の傳道師が宣敎の爲めに渡來せしより以來凡そゝの身を後にして天の道を先にし險を犯し難を破りて遂に今日あるにいたりしは實にその豫想し能はざるところなりといへり始め兩三年間に矢野某なる一人の信者を得しが僅に三日にして沒し其他には千八百六十三年迄一人の信者をも得ざりしといふ蓋し人みな渠儕を一種の天主敎徒となし新に渡來せるバテレンなるべしと想へりとぞ其後三年を經てその年の五月にいたり若狹某といふものとその親戚とに聖洗の式を施し同年また肥後熊本の人を得翌年更に三人の信徒を得るに至りしといへり。

海岸敎會設立

我國にて最初に設立せられたる敎會堂は海岸敎會也これは濱濱滯在のバラ氏が盡力によりて千八百七十三年遂にその創立を見るにいたりたるものにて海岸敎會の設立は我國基督敎會の新紀元なりしといへり始めバラ氏が主任となりて青年と共に祈禱會を開きしにこゝに非常なる聖靈の化に浴し連夜相集りて驚く可き程の靈火ある祈禱會となりぬ偖は天國近けるか否天國この地に來れりとて宣敎師等の喜び一方ならず中には我國人の熱心なる祈禱會の樣を見物に來るものさへありて遂にその景況を米國に逐一報導せしに傳道會社にては時機至れりとて五十九年より七十二年迄三十八人の宣敎師を送り來りしものも翌七十三年には一年間に六十八人の多人數となり海岸敎會の如きもその年三十八人の信徒を得翌年は百人近くになれりとぞ。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

これよりして七十三年の秋にいたりダムソン氏によりて新榮教會出で長老教會といふもの起り翌年住吉町教會成り七十四年にいたりては神戸大坂に組合教會の設立を見これより雲の興るがごとくまた數ふべからざるにいたりしとなむ。

避暑の教

井上次郎

避暑は心を淸め躰を安んずる方法なるに、反つて之を游蕩放埒の戯れに悪用し、亂飲暴食して寧ろ身躰を傷なひ、倘且つ其心をだに不潔にするもの多し。是れ、避暑と云ふ恵みの方法を汚がし、其神聖を殺ろすものと云ふべし。

茲に先づ避暑に際する衛生上の敎を述ぶべし、靑葉茂り、白波躍る邊り、最と静かに思ひを潛めて修養するの工夫は、本誌の上に常に其説見ゆ、今更めて言わず。こゝには旨と衛生上、身躰上の説を列ぬべきなり。

扨て、都を出でゝ、海邊、山中に暑を避くる初めは、喩えば籠鳥の籠を脱けて靑空に飛ぶが如く、心氣爽快にして天に躍る心地のするものから、俄かに快活となりて非常に激しき遊びを一時に試むるものあり、是れ大ひに宜しからず、斯る折には、はやる心を暫らく静め、躍る心の手綱をシカと引しめ、叙々と遊びを増し、日を重ぬるに隨がひて追々と激しく運動するの心得大切なりとす。此の一ヶ條を好く覺悟せざる時は、年少血氣の男子に於てすら時として害を受く、况してや、中年老年の人に於ては特に然り、婦人に至りては尤とも然りとなす、此の戒しめを好く守らざるときは、秋に至り、リウマチスム、心臓病、吐血、などの病を引起すことあり。

同様に大切なる心掛は、激しく運動して心氣鼓動する時など直ちに飲食せざることなり、少なくとも半時間を置き、心沈まりたる后ならでは決して飲食す可らず、たゞに食物のみにはあらず、飲物と云へども亦た實に然るなり。高山に登り、汗滴々として下る時、淙涓たる泉の音に神迷ひてグツト四五杯を傾むくるなどの亂暴は多く見る所ろなり、或人は此の處置を稱して自殺に均しと云へり。實に恐ろしき害あるものなり。

甚はだ暑き時に歩行することあらば、たとひ疲勞することなくとも、必らず、二三町毎に暫らく休息して神を養なふことを要す

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

此を秘訣とす、之を知らざる人は、猪が猛火の中を飛ぶ如く、たゞ一時にあせりて狂奔す、一里二里を行かざる間に直ちに倒る、中には遂に死の病ひを引起すことすらあり、初めより徐々として進まば、八九里の道も甚はだ容易すくおぼゆるものなるぞ。

安息日を守る宗教家にとりては恰かも好きとなれど、然らざる人は、一週一日の割にて、是非激動を休むを要す、何如に避暑中の遊びなりとも、日々變化なく同様に遊び動くときは、大ひなる疲勞を招きて害あり。故に見よ、七日に一日を休まずと云ふ人も、實際は大抵夫程の割にて勞れて休み居るものなり、故に初めより之を規則として覺悟の一ヶ條となすべし。

惣じて飲食は程好くし、決して度を過すなかれ、何時にても暴飲暴食は宜しからねど、避暑中の遊びに此の心得なきものほど殘り惜しきはなし、何んとなれば、一と度び度を過して腸胃を痛むれば、運動は反つて宜しからず、家に閉ぢこもりて空しく悵望せざる可らず。又、宿の主婦もことさら養生の爲にとて料理する心切はなかるべし。花を眺めつゝ室内に病み臥すとの何如に苦しきや、風光明媚の地に暑を避け乍ら、病んで一室内に閉こもるは何等の遺恨ぞ、ゆえに避暑中は特更ら飲食に愼しまずんばある可らず。

溫泉場の湯に男女の區別なきは大御代の一大欠典なり、吾黨は數年前より屢ば之に注意を引きたれど、今以て其行はれざる所ろ多きやに聞く。溫泉場は外國人などの往來も烈しき所ゆへ尚更ら恥かし。されば、男女の區域なき湯にゆかば、主人に斷わりて、何時より何時迄を女の沐浴の時と定めさせ、其間は他性の人の來ることを防ぐやうにすべし。この委頼は道理ある殊勝の事なれば、主人も決して否まず、客人も不平を言ふとなかるべし。吾社中の一人、ある所ろに入浴せるとき、可憐なる乙女何氣なく來りて浴す。ハッと思ひて此方は身を隱したく思へるに、彼方は至つて平氣にてサッサと入浴し、而も桶に湯を汲みて之れ遣ひ玉へなど言ひて差出せり、喫驚して返へする言葉も出ず、早々にして上り、嗟歎して其人の一生の爲に祈りしたるとありとぞ。彼の人の素性を察せられて氣の毒なり。婦人は惣じて恥かしみ（ヂリケシー）と云ふ一つの愼しみを失ふ可らず、デリケシーなき婦人は、ビナス

が赤裸かにてシコふみ鬼と角力とるが如し。

婦人の飲酒は何處にてもあるまじきものなり。暑を避けて酒に熱するは尙更ら心なし。温泉塲など人の往來多き所ろにて此の醜態あるは尤とも見恐くし。

磯邊あらば、貝。山中ならば草の葉。野邊にてあらば昆虫。何處にゆきてか、淸き研究の材料なからん、かゝる益ある樂しみに身を任することそ「避暑中」の婦人が最良の遊びなれ。

成べくは、定まりたる宿を借らず、茅屋にてもよし、一つの軒を借り、家族もろともに暑を避くべし、宮よりわら屋に轉ずれば、ホームの味ひ鮮新なり。片田舍の野菜、濱邊の鮮魚を買ひ、烟にふすぶりて手づから料理し、一家淡泊に暮らす時は樂しみ幾そ千ぞ。たとへば行厨を提さげて、春の日和、野邊にピクニック(小遊)せしが如かり。

故ありて、都を出でがたき家族は、東京ならば兩國、西京ならば鴨河の邊に一宵を過ごし、やからもろともに胸を開きて凉風を納れべし。

家政

母としての經驗について

グラッドストン夫人記

今思ひあたれることにて小兒の着物につき最も注意すべきは成るべく輕くして柔に時候の寒暖を考へてこれに相當したるものを擇むべきなり。殊に小兒の着物は着更へ易きように仕立て置かざれば往々にして不愉快なる感じをおこさしむることとあるべし。

小兒の衣服

世に母といへる經驗を持ちしものは小兒の衣服の寛やかにして胸と胃とを壓することなく手足を動かすにいたく自由なるよう作るべきことを感ずべけむ。スクワイア國手のいひしがごとく濕氣あるものを小兒に着せ、もしくは洗濯のときよくすゝぎ乾かさずして石鹸曹達などの落ちざるものを其まゝに着することとあらば、これが爲に小兒をして不快ならしむることとはなはだし。小兒の衣服は帶または紐ようのものにていたく之を結ぶが爲に害あるごとき塲合はつとめて之を避くるようになし、またリネンのたぐひは時々更へて用ゆるをよしと

す。大凡小兒といふものは冷え易きものにして體温の供給はなはだすくなければ、着物を作るにも先づ暖むる心得にて、これを着て心地よきよう感ぜしむべきものとす、されどこれがために暖め過ぐるようのことありては反てよろしからず。小兒を抱き或は背負ひて外に出るときなどは殊にこれを暖め過さゞるよう心掛け、家に歸りても汗ばみたる「ショール」にて小兒の襟を包みなど決してすべからず。

これには勿論特別の塲合ありて、その特別の塲合には特別なる手當をなすべきは今更言ふを待たざれど、ことに月不足にて生れたる小兒のごときは之を暖むること尤も必要なり。かゝる塲合には「フラネル」にて小兒をつゝむかた最も安全の方法なれど、近來經驗せし人のいふところによれば綿の籃を用ゐて決して小兒を空氣に觸れしめざるをよしとす。

小兒には齒の生ずる時あり。この時にあたりて神經の作用をおこすごとき塲合あらば、これをおろそかに思ふべからず。かゝる折には成るべく頭部を冷すをよしとす、かたき枕、または重き頭巾帽子などは殊に避くべきものなるを、世には親の心の愛情と高慢とより紅白の花または鳥の毛など飾り多き帽子を着せて、これが爲にかのあはれむべき頭を壓する例すくなからず。かゝることは夏季のみにあらず冬季たりとも亦よろしからざれば母たるものは心すべきことなり。

小兒のために用ゆる車

かの小兒のために用ゆる小車はいたく注意して之をつかふとき、はなはだよろしきものなるは言ふを待たざれど、われらが多く路上にて見受くるごとき殘酷なる用ゐ方にては小車の効用もなきものなり。かの小兒のすや〳〵と車中にありて眠り居れるとき、それらをも容捨せずしていたく車を動搖せしめ、もしくは石に跌かせ、おやうき所に行るごときは、いかばかり小兒が虫をおこし諸病のもとひとはなりつらむ。これらの不注意よりして寒氣を催し易く脊骨を害なふのためし少なからず。

保姆たるものは慈愛のこゝろして家の内と外とを問はずよく小兒の寒熱を思ひこれを防がんと心得べきなり、保姆の怠りによりて、小兒の爲の保姆さへ反て不爲となり畢ること甚だ多し。

冷氣に觸れ冷水に濡るゝはたとひわづかたりとも小兒の爲め

有害なるよしはスクワイア國手も常に口にするところなるが單に冷氣なるのみならず濕氣ある家屋水邊などは殊に小兒を伴ふべきところにあらず。小兒の諸病百熱に困むもの又は腫物などになやめるものは多くその室の冷氣なるが爲にしてこれが保護を怠りしより來るものなり。また氣候の劇變などは尤も小兒の爲に注意すべきことにして、四五歳の小兒すら冷氣の塲處に永く步みがたく、直に疲勞を覺えて風邪を引き易きことかゝる時に越ゆるはなし。かの小兒の急に寒氣を催すごときは戸外にありて風無きところより急に冷氣ある途に出づるか、または暖かなる戸内に歸りて汗ばみたりと衣服を減ずるごとき塲合に存外なる病根を來すものなりとす。抱きかゝえて戸外に出でし母の手なる赤兒のごときも斯の如くして風邪を感ずることあり、あたゝかにして母に抱かるゝか又は保姆の手にありて堅く閉したる馬車などに籠り、いつしか睡り入りしものを家に歸りて冷たき床上に置かばその寒氣を感ずることいふ迄もなし。家に歸りたりとて急に着類を減ずるはよろしからず、室内の溫度などもよきに取計らふべきものなり。

しつけ及び德育の習慣

今こゝにこと〲しくいはむとにあらざれど、小兒にはしつけの大切なること及び淑德の化育によりてかの小さき塊血を敎ゆるの必要なることを述べむに、小兒なるものは物の道理を辨ふる前すでに大人の爲すところを見習ひて、大人右すれば小兒も右し、大人左すれば小兒も亦左するもの故、よき例を示して之をしてよく見習はしむべきなり。

家の内の風は溫かに吹て見るもの聞くもの一として和樂の氣を感ぜざることなき「ホーム」にありその淸光靄氣に包まれて生長する小兒の幸福は凡そ物に譬ふべきようなし。未來に對してこの敎へ方により精神身躰いづれを問はずこれよりその發達を始むればその愛兒を失ふの悲み萬々あるべからず。かくして吾宿は樂しきものなり、吾母のふところはうれしきものなりといへる情の小兒の心中に涌き出るときは、これ實に「ホーム」の花といふべくして家族の中心ともなり樂園の影をこゝに認むべきにこそとなむ。

兒籃

我が宿の花

第六回

若松しづ子

アーサは夜中落々せず熟睡した様子は有りませんかつた。折も折とて、家に取込が有つて、家内中手が塞がつて居る時分に、自分が此怪我をしても氣迷ふ心には困難も幾倍増して、大きく、考へ、力さへ枯て、登るとの出來ぬ山の如くに思はれ升た。父が東雲の頃に戸を開いて、内の様子を窺ひ升と、病人は右左りに身を悶へて居る鹽梅、醫師の目はなくとも、重い病ひといふとは誰にも分り升た。昨夜病室に伽をして與れた彼の若人と一言二言交はした後、グランド主人はいんぎんに禮を述て、看護の役目を解き升た。若人は立去らんとし小聲に、

御病人が時々讝語を仰い升、何かあなたが負財の爲に引かれてお出なさると思つての様子です。

聞いて父は思はず顔の色を變へ升た。若人は様子を察して、其顔はせず、婦人に似たる細やかな斟酌をして、立ち去り升た。間もなく、ルーセがソッと部屋へ這入り升たが、床に近づひた時の容貌を見て、父はルーセが自分と勘定の違はぬとを知り升た。父はルーセに

誰か外に起きて居るかへ、

ハテが起きて居り升から、直つき下りて參りませう。おつかさまは如何です。

夕部はよく休んで、今もまだ寐て居るよ。ハテが來たら、こゝに居させるが好い、おまへには一寸用が有るからと

先へ出た父の側へ間もなくルーセが行升た時、父は唐突に

誰がアーサにわしが負財の爲に拘引されるなどと言つたのだ?

私の知つて居る處では誰も言つた者はないのです、第一負財のあるといふとさへ誰に聞いたか存ませんのです?、

併し有といふとは確に存じて居つたのか?

ハイ、存じて居り升たが、それを聞升たのはツイ此頃です。

イヤ、困難といふとは知つた積りで有つたが、それもいろ

はにして、いの字も知らぬ様だ。それで、なにか、あれがまたおまへに話したといふ譯か？

といふ父にルーセが

いゝえ、わたくしは其前に存じて居つたので御座い升、もう久敷と存じて居るのです、それで、おとうさま、アーサもわたくしもおとうさまにどれ程お毒の氣に想ひ升たか、いつぞは、ゆつくりとお話しゝして手業あり、なになりして、おとうさまのお手助がし度と存じて居り升た。

父はかく聞いて、娘をしつかり抱き占め、其手を頭に戴て。祝福を祈り升た。丁度此の時、ルーセはホレスの泣聲を聞升た。

ドレ、參りませう、ホレスがおつかさまを起すといけませんから。

といふを初として、ルーセの心遣ひと、職務の日が新たに始まり升た。さてこれからそれ〱と雜用に身を任せる中、ルーセは天に附ける愛と地につける愛の差別を殊に深く感じ升た。目の前なる雜用の爲に、懐かしく思ふアーサの側から引離され升たが、神の愛よりは離すとが出來ませんかつた。萬事神を畏み、其御爲とおもへば、絶へず天を仰いで、御神と交親が出來升て、深き憂勞のある心の中に、平和も共に宿つて居り升た。

アーサは刻々立績けに悪しき方に向ひ升たが、ホワイト氏は實の親に劣らぬ慈愛をもつて、治療を施し升た。心切なる隣人は家の雜用の手助に來り、村の若者は終日の勞働をおへて後來つて夜もすがら看護を致し升た。例の若紳士だちさへ病人の安否の定まらぬ中は立去らぬと斷言して居升た。かく出入の繁くなつて來ては、アーサの病を蔽ふて、母に知らさぬ譯には行なくなり升た。事の始末を聞くと同時に、母の日立が捗取らず成升て、哀れや赤見までが同じ調子にむづかり出し升た。こゝらが實に此家族の爲には困難の絶頂で、其中に這入つて居た人たちはどうして一日〱を凌ひで行つたか。知らぬ位でした。此家族の爲には支となつて保護す可き全能の手が有升たが、それを認めさへすれば、火の海の如き厄難を免れたとに不審を懐く筈も有ませんかつた。然してアーサが此家族よりもぎ取らるゝ時期は未だ來ませんかつた故、數週間の大病を患つて後、徐〱恢復の方に赴き升て、家族の

心痛の重荷も少しは輕ろくなり升た。併しながらまだ〳〵看護は容易になつた譯では有ませんかつた。熱が去つたあとの衰へた姿は實に命のあるものとは見へず、素人には病の頂上に熱發して居つた時より尚一層大病に見え升た。ルーセは看護にかけて餘程勝れものでした。アーサが口を開かぬ先に先づ其望む處を知り升て、病人に喰べさするにも、歌ふて、鬱を慰むるにも、堪ふるとの出來る丈にものを讀聞せるとも、ルーセ程鹽梅のよく出來た者は有ませんかつた。ある日ハテが

あたしは始からなんでもよくおなんあさるに違ひないと思つて升たわ。ダツテまさか、死んじまつて、あたしたちをみんな置いてくなんてネ。

アーサは

死ぬよりはまだ惡いとをするかも知れませんよ。

アレ、死ぬよりまだ惡いとなんで、僕が倒された時ネ、なんでもよつぽどひどい怪我をしたと思つたの、一寸しか考へる暇もなかつたけれど、さうこわいとも思ひませんかつたよ。

さうでせうとも、ダツテ、アーサさん、いつでも好い人なんだもの。

それは違ひ升よ（といつて、少し考へ）みんな神の惠です。

ハテは此時顏を赤め、輕く何とか返事して居り升たが、暫くたつて、一同がハテの室に居ぬに氣がついた時には、二階で泣いて居り升た。併し直ぐ後に以前と同じ元氣で下へ來り升た、なぜといふに、また浮いた心の表面丈が少しく騷がせられた計で有た故でした。

批評

○家族主義女子敎育

神戶松蔭女學校の敎頭望月興三郞氏、多年家族主義の女子敎育と云ふものに說あり、去年來、松蔭女學校に於て實際其說を行試せらると云ふ。今ま此小冊子は、其說を告白したるものにて、一卷を六章に分ち、緖論、家庭と學校、前代の女子敎育現時の女子敎育、家族的女子敎育、結論と順次に說き下る。云く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

予は女子の高等教育を賛成して人後に立たずと雖ども今日に於て一般の女子に高等教育を施こす事には反對なりと如此き主旨を以て、普通一般の女子には家族主義の教育を以て最良とすと説けり。吾人も久しく女塾の制の改ためざる可らざるを感じ、曩に別舍(カッテージ、システム)の組織を以て之に適すと論つろひしとあり。此書の著者の意見も亦た之に同じきが如し、大ひに賛同する所也。

寄書

○小兒と愛國心

るくれしや女史の文を譯して　或る女

今日は「獨立の日」なりといふことを紀念して、はしなくもわが小兒に愛國の心を教ゆるの方法を思ふ。

なにがしといへる獨逸の一淑女あり。一日わが幼稚園に來りて諸方より集り居れる愛兒等がその可憐の口々より、

われらが父なる神よ、
自由のもとなる大君に、
その大君に、われらは歌ふなり。

とうたふを聽き、かれらがうれしげに國旗を風に飄へし行く樣を見て、その後姿に落涙を催し、國風の因て成るところをさとりしといへり。

三歳兒のたましひは百までもと古へより人のいひ傳へけむもげに、これはまことの理にして動かすべからざる「心印」をおくにも異ならず。

さればうるはしき小兒のおさな心に、愛國のその影をやどしたらむには、後日いかなる花とやなるらむ。

小兒の愛國はこれ大人の愛國なり。

されど愛國のその志を小兒のうちに教へんとならば、先づ教へんとするその人に愛國の志なかるべからず。みづからその國を念ふことを知らずして、いかでその兒に國を念ふことを教えむや。先づ源泉のこん／＼に返れよ。

小兒は何の役にも立ざる如けん
されど大人は幼きとき小兒なり。　ミルトン

○虎烈刺病の注意

山月子

夏は殊に下利に注意すべし、下利は虎烈刺の先き觸れと思ひて油斷せざると肝要なり、虎烈刺患者の容躰を或る醫士より

きゝしに、大抵發病の前二三回續く樂に通じゐる由なり、其通じによりて胸の工合も腹の加減も却てセイ〳〵するやうになる故、氣にせざるのみか、却て喜ぶ位なるに、其四五回目に至りて俄然劇瀉を來し、一回にして忽ち目眩み、二回三回目あたりには立て厠を出るとさへ能はぬほどに弱るといふ、注意すべきとにこそ、併し怖るゝは大に宜しからず、怖れずしてよく注意すべし。

○文法上女子の解釋

なにがしといふもの女子を文法上より解していひけるは、

一 名詞として見るときは目的格なるべし。

一 代名詞として見るときは女子自身のことなるべし。

一 動詞として見るときは命令法にして現在なるべし、これは女子の男子につかはるゝとき。接續法にして未來なるべし、これは男子の女子につかはるゝとき。

一 形容詞として見るときは最高級にあるべし。

一 感嘆詞として見るときは永續の部なるべし。

一 接續詞として見るときはよろしからず、そはかれが文章多く接續せざればなり。

一 副詞として見るときは是亦宜しからず、そはかれ何物をも「モヂファイ」せざればなり。

一 冠詞として見るときは不定なるべし。

○談緒寸絲

月は一「セコンド」に三千三百三十三英尺を走る。

鯨の兒の胃袋には一斗の水を容るべく、

象の成長するは二十五年を要すべし。

合衆國の大頭領となりし人は二十三人、

佛蘭西「パーセール」の宮殿は費用金二億万圓、

通常の男子は長一「ヒート」につき目方二十八「ポンド」、

英人の髪の色は薄黒くして褐色なるもの他の色より二倍。

猫は一萬六千「ヒード」の高さに登るとき息絶へて死するも人と犬とは然らず、

歐州の「デンマーク」は國少なれども人民の酒飲むこと獨逸の二倍なり。

米國には「コロンバス」と呼ぶ街の數二十三ありて、「コロンビヤ」と呼ぶは三十八あり、

千七百七十八年メスメルといふもの睡眠術を發明したり。

天然の法によるときは物の冷たきは暖きよりも重しといふ、たとへば水のごとし」

「カリホルニア」にては火山破裂して四十里の間人畜の死傷するものその數を知らず。

千八百八十九年の計算によるときは千人のうちにて死去せるもの英國に十八人、佛國に二十一人、獨逸に二十三人、以太利に二十五人、米國に十七人、墺太利に二十七人。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

孤兒之友

聖約翰婦人會附屬大阪救兒院第二回會計報告

明治廿五年三月ヨリ六月ニ至ル四ヶ月間

收入

一金五圓拾五錢貳厘　前月ヨリ繰越高
一金四拾參圓七拾七錢五厘　會員及ヒ贊成員寄附金
一金貳拾三圓貳拾錢五厘　大阪寄附白米二石九斗五升五合ノ代
一金拾五圓四拾九錢四厘　京都並ニ大津寄附白米一石九斗六升七合ノ代
一金貳拾貳圓八拾錢　入院兒ノ親族寄附金

內譯

金八圓　竹田氏
金八圓　舘田氏
金參圓六拾錢　木谷氏
金貳圓貳拾錢　小八木氏
金壹圓　稻垣氏

一金九拾四圓五拾錢　米國人寄附

內譯

金參拾四圓五拾錢　プール君 爲家賃及ヒ保姆報酬
金四圓　ワーレン君
金貳拾圓　米國子供有志輩
金貳拾圓　ヘリヤ君
金八圓　キャンベル君
金六圓　フォース君
金六圓　クレメンス、プール君
金四圓　ページ君

一金七拾圓六拾四錢五厘　臨時寄附金

內譯

金拾八圓　婦人會特別寄附金
金參拾圓　プール君特別寄附金
金七圓五拾錢　無名氏
金參圓五拾錢　マキム君
金貳圓　福井フサ君
金壹圓　長尾サト君
金五拾錢　石井氏 岡山
金貳拾錢　樫內晰子君
金壹圓　チング君
金壹圓　中村友吉君
金貳圓　多木君
金五拾五錢　根來氏生徒十名
金拾貳錢　巖本君
金壹圓　尾崎ヨシ君

右大坂ニ於テ

金壹圓　ムーレー君
金參拾錢　佐伯、西垣二君
金五錢　津村君 滋賀
金拾錢　西垣喜太郎君
金拾錢　池袋清風君
金四拾錢　水田五君
金四錢七厘　山內尾之助君
金貳拾錢　平田八郎君
金七錢八厘　森治助君

右京都ニ於テ

一金壹圓六拾六錢　入院兒撤糸手間賃

以上合計金貳百七十七圓貳拾三錢壹厘也

支出

一金百七拾四圓貳拾五錢　經常費

內譯

金貳拾貳圓五拾錢　本院家賃
金百拾貳圓二拾五錢　救兒十八人賄料
金拾六圓　保姆報酬
金四圓　保姆手傳報酬
金壹圓五拾錢　下婢手當
金拾八圓　保姆並ニ下婢食料

一金八拾圓　本院借家敷金
一金拾三圓五拾八錢五厘　本院諸雜費
一金八圓三錢　京都出張所諸雜費

以上合計金貳百七拾五圓八拾六錢五厘也

收支差引

殘リ金壹圓三拾六錢六厘也

外ニ

一金貳拾六圓拾三錢四厘　前年度繰越積立金
一金三拾九錢九厘　岐阜入院兒三名ノ預リ金

備考　京都出張所ニ於ケル收入及ヒ支出ハ昨年十二月ヨリ本年六月ニ亘ル者ナリ

右之通候也

明治廿五年七月

聖約翰婦人會々計係

●岡山孤兒院

岡山市並郡村大洪水にて大破損を來したれども、川東殊に孤兒院女學校周圍は全く無難の由、七月二十九日發の報ありたり、祝賀感謝の至りに堪へざるなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

朝鮮通信

其傳道、教育、及女風

着韓以來見聞致せし事にて愛兄の御參考に相成るべく存ずる事些か申上候。

朝鮮人は怠惰に御座候。

彼等の怠惰なるは教育なきと又習慣とによるとなるべしと思はれ候へ共そは重なる原因にあらずして朝鮮國の制度之れを然らしめたるとと存じられ申候、如何となれば彼等の中若し少しく人に勝れて富まんか、直ちに奸吏等に其産財を取り上げられ或は誣罪に陷られて遂に其財產は沒取せられざるべからざるの運命に至ればなり、之れを訴へんとするも訴ふるに所なく。唯怨を呑んで獄屋に呻吟するのみ或は落首せられざるべからさるの止むを得ざるに至るべし憐むべし。故に彼等には別に人に勝れて富まんとするの希望心起るとなく唯雞の如く貯ふるとなく其日其日の生活を營むのみ已に富まんとするの希望心なし。どうして精勤節儉の心起るべきや。已に精勤の國民にあらず。貧國民なるべは當然のとなり。不潔、飯酒、喫烟、喧嘩。詐僞等の惡德付き來るは又當然のとと感じられ申候。實に彼等は不潔にして又飲酒、喫烟、の國民に御座候。先づ奸吏の放縱を抑へ韓國の裁判法を改むるにあらざれば彼等をして到底、精勤の國民たらしむるを能はさるべしと感じられ申候、之を改めんとせば官吏にはそれそれ定めたる丈けの捧給を必ず與へざるべからす。今日の處官吏には實際捧給は與へられさる由なれば是非下々の人民を害ても己が糊口を謀らざるべからず（彼等は初め官吏となる時はそれ丈けの資本を下したるとなれば是非人民を害ても其れ丈否な利益を取る爲めに官吏になれりとの心得なり）此の事情あればこそ政府も奸吏が其不法の行爲を遠目に看過して知らざる眞似を致すなり。故に朝鮮國民をして勤勉の國民たらしめ此國をして強く且つ富みたる國となす內は獨立の實を保ち外は一國の躰面を保たしめんとせば容易ならざるとと乍ら朝鮮政府の制度より改革せざるべからずと考へられ申候。衣食足て禮節を知るは人の通德なれば此貧國民の教育、傳導せんとするものは此等の事情を明かにせざるべからずと感じられ申候。

教育は最も不完全に御座候。

啻に小學校なきのみならず中學校なく。又大學校なし唯最も不完全なる私塾樣のもの所々にありて千字文位を教へ教られてそれで十分なりと思ひ居る有樣誠に氣の毒なる次第に御座候。此の私塾樣のものも其數甚だ僅かにして維新以前我國に盛に行はれし寺小屋の如きものとは大に其赴を異にせしものに御座候。依て此國の子弟は普通の教育を受くるを能はざるのみならず是の最も不完全なる私塾的教育すらも全國民一般に受くるを能はず。

女子の教育も亦最も不完全にして若き時即ち勉學すべき時は唯一室に隱れて人に見ず又敢て教師を家に招て教へらるゝなどと云ふとは少しもなき由にて其家の娘になればなる程人に見ず七八年其家に仕へたる最も忠實の奴婢すらも唯此家には二人或は三人の娘ある由を聞けども實際娘を見たるとなしと云ふは敢て珍しきとにあらざる由。斯の如き有樣なれば學校に通ふて勉學するとを得ざるのみならず此の不完全の私塾的教育をも受くるを能はざるは誠に氣の毒なる次第に御座候尤も朝鮮女子の職務如何を尋ぬる時は今日日本に於て施す教育の如きは必要にあらざる如く感ずるは當然のとかと思はれ申候。如何となれば女子が緣付て後重なる仕事は裁縫にして之れあれば先つ十分の女なればなり此の無教育の青年此の無教育の女子と相婚して將來の國家を成んとせば其將來の如何は識者を待たずして知らるゝとと感じられ申候。

又彼等は大に過てる考を持つ居候

朝鮮一般の風習かも知れ申さゝれとも都會になればなる程甚しき由に聞き及び申候。そは何事かと申すに歷々たる一疋の男子か二三人の妾を持ち之をして妓を營ましめ己れは其揚代にて安樂に生活する卑屈無禮極りたる有樣きくも誠に氣の毒に感じられ申候否な一人の己が正妻にすら妓を營ましめ己れは日々安樂怠惰に遊んで暮すとを甚だ榮光の至りと考へ働て食ふは朝鮮男子に取りて大に恥とする所に御座候生京城に參り一旅店に投じたるに該旅店の直ぐ下に最も不潔なる一軒の朝鮮人の家あり。宿の主人にきけば「あれは傾城です」と申したり且つ曰く黃昏頃より此傾城の主人は何處かへ遊びに往くと嗟乎何事ぞ。我國の青年男女諸君來りて此の國民を教育せざるか。此國民に傳道せざるか。此の國民を救濟せざるか。嗚呼我國青年男女諸君の中には仁人義士あるべしと自問自答せしと幾度ぞ。兼てより愛兄にも玆に御高說あるとと考られ申候。

○朝鮮の女は誠に優美に御座候。日本の振袖の如き誠に美麗なる長き衣服を以て頭髮及面を覆ひ僅かに兩眼丈けを殘してゆる〳〵と步行致候彼等の步み方は日本の婦人方よりも寧ろ躰操の法に適ひ居る由に御座候。（其步行の運きによりてにあらず）獨り女のみならず男子も又然り此れ穿き物の爲めに自然に進化し來りたるものならんと思はれ申候。

朝鮮の女は殊に裁縫洗濯の術に於て長ぜるが如く相見へ申候裁縫は實に綿密にして且つ奇麗に御座候恰も西洋の微針にて縫ふたる如く相見へ申候故に小生一人の韓人に向て如何にして斯くまで綿密に且つ奇麗に縫ひ玉ふやと質問せば一針縫ては針をぬき又一針縫ては又針をぬき實に時間と勞力とを惜まず綿密と奇麗とを主として衣服を縫ふ由に御座候。日本服の裁縫の如何にも粗末なるは韓國の婦人方も常に笑ひ居る由に御座候獨り婦人のみならず生が漢江を下る時同船せし男子までも生か衣服の縫方の粗末なるを笑ひ候故に日本の男兒は衣服の縫方などには頓着はせぬとて一笑に附し去り申したり。

○朝鮮の處女は到底見ること能はずときゝて參り候が實にきゝたるに違はず處女は決して見られ申さず候。良家になればなる程若き女を人に見せざる由にて早や七八才或は五六才より一室に隱して人に見せざる由に御座候。彼等が結婚して後ちと雖とも夫の眞友にすら見えざる由。眞友同士にて互に各の妻君を見たることなしと云ふ。一日生田舍の旅店に投じ晩涼に乘じて漢江河岸垂柳依々たる處に散歩を試みたるに三人の婦人（餘り年取らざる婦人）洗濯細中なりしがふと生が彼等の後に立ちたるを見て狼狽の躰なりしも如何とも致し方なきものと見え三人頭を集めて面を隱したり生は餘りに氣の毒さに直ちに步を轉して歸舍したり。彼等の年若きものに若し旅行して日本人（朝鮮の男兒にも然らんが）に遭ふ時は二三町も先きより横逕に避け隱るゝ由に御座候。唯老女は然らず振袖の如き長き衣裳を被り悠然として緩步するなり極下等社會に至りては去ることなく素面にて頭に荷を載せて健に步むこと恰も京都近世の婦女の如し。

○又朝鮮婦人は洗濯甚だ上手にして彼等の洗ひ上げたる寒冷紗の單衣を見るに實に奇麗に御座候、人の云ふ所をきけば極黯く汚れたる衣服にても彼等全く新きものの如くせりと彼等は厚きへらの如きものを以て川流の岸に往き平らたき石の上にて洗はんとする衣服を實に丁寧に幾回となく打つ殊に月夜には多くの女河岸に出でゝ洗ふ故其音誠に賑はしき由生龍山に一泊せし時は月夜にはあらざりしかども可なりに打つ音きこえて都鄉近き中田村の紙打つ音を思起して最も愉快に感じ申候。

以上は至て不完全の觀察に御座候へば誤りも有之候へば御免し被下度候

朝鮮國仁川朝鮮新報社

七月廿三日認　島貫兵太夫

巖本善治愛兄様

もう一つ申上度は朝鮮男子は婦人を眞に尊敬するの道を知らざれども婦人を非常に大切に取扱ひ申し候。

之れに付色々美しく事を見聞致したれども紙面限あれば後便に讓り申候早々

女報

可愛子編

●皇族の發着　威仁親王妃慰子殿下は載仁王、實枝子女王兩殿下同伴にて七月三十日出發、神奈川縣下相州三浦郡葉山村に、梨本宮守正王殿下は、去る一日出發京都外三縣下へ孰れも旅行せられ、又長野縣地方へ旅行の能久親王妃富子殿下は一日歸京されたりと。

●岩倉公爵夫人　は避暑の爲め七月三十日朝鎌倉に赴けり。

●露國皇后陛下命名祭　去八月三日は露國皇后陛下の命名祭なれば外交上の式により、内外の貴顯は同國公使館に出掛けて祝詞を呈し、又ニコライ主教の祈禱等もありし由。

●レース製造に就て　日本婦人は指頭の神經敏捷なるを以て、レース製造等は至極適當の職業なるべし、左れば近來其技術頗る發達し歐洲各國より續々注文あるよしなり。（時事新報）。

●レース教場財產差押解除の訴　東京府士族諸氏より丸田正盛氏等に對しレース教場の財產を差押へたることは、前號赤表の紙上に記載せしが、右に付き丸田氏は代言人鈴木充美氏外一名を以て、東京地方裁判所へ財產差押解除の訴を提起したりと云ふ。

●米國大博覽會日本婦人會の設立　歐州に於ける婦人の熱心に同會へ出品其他意匠を凝したる運動を爲すことは、隱れなき事なるが、本邦にても之が企圖に應じ、吾國婦人の古來世の公益を起し、或は家政を治むるの實況、又は繪畫著書の如き高尚のもの、又は裁縫機杼の如き手工の微妙、文房諸具の如き風雅韻致のもの等苟も我國粹として外に示して誇るに足るべきものを出品せんと、府下の貴婦人中協議經營中の處、恰もよしシカゴ博覽會事務局中の婦人委員總裁パーマー夫人より、本邦婦人も相當の出品あらんことを在京米公使を經て其筋へ懇請せしに、畏くも皇后陛下には之に先ち、既に我貴婦人中此企圖ある由聞し召され、特に右團躰へ出品費として御下賜金の御沙汰あり、愈々同會も成立したれば、米國大博覽會日本婦人會と稱し、委員長には毛利公爵婦人承諾せられたるよし、又同會シカゴ府日本婦人館内の一部を申受けて出品することなれば、其交渉事務も直接に同婦人委員部と往復處理するものにして、臨時博覽會事務局とは別物なるは勿論、其出品物撰擇採集裝飾陳列等其他の事項に至るまで、總て同婦人會にて擔當處辨する由にて、事務は庶務調査出品の三部に分てり、其の各部委員姓名は左の如し、

出品部委員

岩倉公爵夫人　蜂須賀侯爵夫人　鍋島侯爵夫人　樺山子爵夫人
三宮正四位夫人　戸田伯爵夫人　柳谷從五位夫人（補）

庶務部委員

伊藤伯爵夫人　大山伯爵夫人　後藤伯爵夫人　土方子爵夫人
陸奥從二位夫人　花房從三位夫人　瓜生從五位夫人（補）

調査部委員

前田侯爵夫人　松方伯爵夫人　榎本子爵夫人　高島子爵夫人
九鬼正三位夫人　林從四位夫人　高嶺從五位夫人（補）

書記

從七位加藤錦子　正八位武村千佐子

●日本婦人會事務所　シカゴ博覽會日本婦人會にては此度農商務省中へ事務所を設け、目下の所にては時々庶務委員出頭して事務を取る筈なるも、追々は日々出頭することに爲すべしとの事なり。

●婦人工藝家の撰拔　米國大博覽會日本婦人會は、汎く全國より工藝の技倆ある婦人を召集し、日本婦人の渡航をなさしめんとて、各府縣に向ひ其撰拔を依賴したる趣なるが、神奈川縣は陶器、七寶の製造、錦付業者、陶磁器業者、下繪業者等に熟達なる婦人を撰拔せんと、目下取調中の由なり。

●出品協議　米國大博覽會事務局にては、七月廿五日午前日本婦人會員（貴婦人）六名を出局せしめ出品上に付種々協議をなしたりと。

●東京婦人矯風會副會頭の轉地　同會の副會頭となりて以來萬づの問題に付き熱心に盡力せられし海老名りん夫人は、都合によりて遠からず良人と共に夫人が古鄕なる福島縣に歸縣せらるゝとなりたれば、去月十三日女子學院にて送別會を爲し、旁々將來運動上に付き協議ありたりといふ。

●ウエスト孃渡航の時限　ウエスト孃は、今月二十二日發のアラメダ號にてホノルヽ府へ出立せり。八月十六日桑港より我が橫濵へ向て航する、オーショニツク號は、ホノルヽへ立ち寄りウエスト孃を携へて九月一日には橫濵へ着する豫算なりと云ふ。

●東京紡績會社　深川東大工町の同會社には、現今四百餘人の工女あり。

●日本メリヤス會社　府下北豐島郡王子の同會社は、目下百人の女工あり。

●鐘淵紡績會社　は資金百萬圓女工千六百人、府下會社多きも之に勝りたる會社なしと云ふ。

●印刷局女工の風俗　は正しくして他の會社の比にあらずといふ。

●在海外日本不正業女子の實況　は石神亨氏によりて去月廿三日は靈南坂教會に廿四日は番町教會に於て演說せられたり、氏は香港新嘉坡等に於て耳聞目擊せられたる狀況、幷に誘拐に遇ふて不正業社會に陷ゐる順序を演じ、進んで世人の不正業女子を辨護せんと試むる謬見を打破し、不正業女子の渡航を禁止するは法律の力によるの外なけれども、此に一つの憐れむべきものありとて、山口縣の某なるもの人買に欺かれ彼地に至り不正業に就けよと勸めらるゝの苦しさに遂に自殺したる事實を擧げ、此類の慘劇一年に二三人もありとのとなれば、此の貞操可憐の少女を救ふには義捐金を募集して彼地に送り當局者に依賴して歸朝の取計をなさしむるの外良策なからんといひ、義氣ある人の協贊を促されたり。

●無告窮民　一女物を背にして本所の往還を行く、臭氣紛々鼻を撲つ警官誰何す、女曰く良人死す、而かも家貧不ㇾ得ㇾ葬、屍を負ふて朝來街を彷徨すと悲絕慘絕。（東京日々新聞）

●女醫間宮八重子氏　は今度本鄕弓町二丁目七番地に開業せり。

●府下の高齡者（婦人）　每月其筋へ府下各郡區中の最高齡者を報告する筈なるが本年四月迄の中百年以上の高齡者なく、淺草區にて女一人九十二年、牛込區にて女一人九十三年の二人最高齡者なり。

●府下のコレラ　大鳥圭介氏の令孃鶴子は去月三十日類似コレラ病に罹り直に死亡せり。

●婚姻統計　東京市十五區に於ける六月中の結婚の數は五百五十二にして前月より減ずると八十二、離婚の數は二百九にして前月に增すと十四也。

●女學生　これを二三年前に比すれば稍や留學女生徒の數を減じたるものゝ如く、而して彼の下宿樓上に出入するものは甚だ稀れなるやうなりと。

●女學生の篤志　昨年來東京府高等女學校の生徒が養育院用の衣服を無料にて裁縫せし數は六百十一枚の多きに及びたるより、同院長澁澤榮一氏は今度同校長大東重善氏へあて謝狀を贈りたり。

●明治女學校卒業生會約則（案）

（會　旨）　同窓の好を育て合志の望を長く離れていよ〳〵會ひ會ていよ〳〵親しまんとて茲に明治女學校同窓會を設立す。

（會員）　吾校普通科及撰科の卒業生を會員とし且つ之に相當するものとして會員の同窓認可せるものを加ふ。

（會期）每年本校に卒業式ある頃年會を開き其他は臨時に開く但し臨時會も亦可成吾校に集會ある頃を撰む。

（會費）　會費は各員年々貳拾四錢と定む。

（會報）　每月一回會報を印刷し各員に配布す。

（會務）　通常の會務は委員五名に托す委員は年會にて撰擧し委員は在校會員中にて撰擧を請ふ委員五名の中にて委員長互撰す委員長は委員全躰に助力して不足を補ふ殘四名の委員協議の上編輯印刷貳名記錄通信に壹名會計に壹名を定む他の細則は委員相互の定約に任ず。

右便利の爲め起草原案として提出す　　委　　員

●明治女學校卒業生會兼送別會　は去る七月十六日午后五時半より同校々堂に於て卒業生會兼送別會を松井まん氏主會にて開く、來會者百余名、會員出席者貳拾九名なりき、

今回卒業せられ新に入會せられたる人々は左の如し

久保さみ子　宮島なつ子　下瀨やす子　佐藤すけ子　村瀨つる子　日高みつ子
穴山まつ子　四條かれ子　佐伯佐依子　中村ひさ子　矢野友代子　平井三千代子
兒玉むら子　川村みつ子　松澤はる子　勝村あさ子　畠中良　子　小池さめ子
森　さし子　伏見きみ子　藤戶くす子　武藤まる子　松井節彌子　平野てう子
原　みれ子

松岡もと子齋藤ふゆ子の二氏は新に高等科に編入せられしに付、會員と見做す。今回委員より規則を起草し、提出したる原案規則（前項）は、會員一同賛成にて可決せり、則ち規則により投票したるに、當撰者は、（委員長）松井まん（會計）山田みき（印刷編輯人）杉山てる（同）增田たき（通信記錄）佐藤すけ議事終りて后宮嶋氏文章を朗讀せられ、幼年生の唱歌あり、后ち氷菓を呈し各自打寄り相語りて樂み終りしは十一時なりき。

●照暗女學校　は七月八日午后二時より閉校式を執行せり、當校には本科と高等科とありて、本年は本科卒業生五名を出したり、因に記す當校は本年中に京都に移轉する由。

●普溜女學校　は七月十三日午后三時より、第三學年卒業式を擧行せり卒業生は中尾ちか、寺澤こずえ、石川すか、後藤こま、の四女子なり。

●パーケンヘッド女史本年四月開校せし松蔭女學校のパーケンヘッド女史は、都合に依り辭職せられたる故に他に善良なる女教師を求む、先頃ショウロック女史赴かれ今度新に看病婦學校を設立せんと計畫中なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●千葉縣下に於ける小學校女教員の俸給　は訓導平均一ヶ月十圓六十四錢九厘授業生平均一ヶ月三圓六十六錢なりとぞ。

●女學生の寫眞を出品す　京都府高等女學校の生徒は現に五百餘名あり、今回右生徒整列の所を撮影して米國世界博覽會へ出品する筈なりと云ふ。

●金澤女學校卒業式　は七月十四日午後八時より擧行せられたり、

邦語科卒業生　　　　（イロハ順）

艱難辛苦は奮發の基礎　北條なほ子、人生の目的如何　中村なほ子、答辭　松野やす子、婦女子の境界　三輪しづ江子、

英語科卒業生

變化　堀あや子、暗夜明星を現はす　高山のぶ子、正しき方針　大橋せん子、告別　二木はる子、人生は行路の如し　安達たか子、女子と愛國心　秋山すて子、婦女子の境界　三輪しづ江子（再出）、茶の湯の由來　城西きく子

●廣嶋女學校　にては來年度より、英語科の外は、悉皆日本語の教科書を用ることに定めたり、現今出席生徒數は、高等科二名、普通科十九名、豫備科四名、小學尋常科十七名、幼稚園二十七名、本年は豫備以上は減じ、小學以下は大に增加せり、校舍新築は、教場は去る五月出來上り、六月四日移轉せり、寄宿舍、講堂、及び教師の室は七分通り出來、九月始業までには落成の積りなりと。

●廣嶋縣下の女學　昨年の調査によるに、女教員は公立小學校に二十八、私立小學校に四人なり、又授業生は公立に八十七人、私立に三人なり◎師範學校女子部は生徒三十五人、女教員五名なり◎各種學校には女教員十八、女生徒百六十九人あり。

●山口縣尋常師範學校女子部　は明治十七年九月設立せり、卒業生を出すと四回、第一回二十八名、第二回十七名、第三回二十三名、第四回二十四名、合して九十二名なり、現今の就學者十六名あり。

●鹿兒島縣尋常師範學校女子部　にては昨年十一名の卒業生を出せり、現今在學者同じく十一名あり。

●婦人慈善會　江州犬上郡高宮村圓照寺に於て、去二十日午後二時より高宮婦人慈善會を開きたり、並川了音師は凡一時間餘の佛教演說をなしたる外、會員數氏の演說あり、近頃の炎熱をも意とせず會員及傍聽せしもの無慮百餘名の多きあり、閉せしは同六時過ぎなり。

●感心な婦人　近江新報に曰く、當地字松本村に住居て雜業職をなせる中山善吉となん云へる者の妻ゆき（三十四）は、夫婦の中に三人の子供ありて、夫善吉は雜業職とて何くれとなく必死となり稼ぎ居るも、如何せん近年一般に世が不景氣と成り行き思ふ樣に、稼ぎ口とてもなく妻子の養育も覺束なきに、女房ゆきは大にこれを歎き悲しみ、夫善吉にかく迄色々と苦勞をさせ置き、妻たるものがオメ〳〵見ては居られぬと、其れに付けても行末遠き三人の小兒を小學校にも遣らず成長しては、嘸ぞや他年親を恨らむこともあらん、世間の人には明き盲と云はれるが如何にも不憫……一層の事に吾も何業なりと內職して、聊かにても夫の手助けし、また成らふ事ならは、我子にも普通の教育を與へて遣りたしと思ひ立ちしが、之れとても女のなす事なれば一つ業や二つ業では迚ても叶なふまじ、いで何なりと手に叶なひし事業を二つ三つも兼れて成さんと、其日よりは毎日〳〵雨風雪の劇しき日にも厭はず、午前六時頃より同九時迄では、二個の手桶に繙を附け棒に吊し擔ひて、町々を「のを――りい――のを――りい――」と賣り歩行き、同九時より午后三時迄では此頃の如き日中酷暑も避けず、頭上には陣笠を頂だき、かもじ洗ひ屋の諸種の道具箱を肩にし乍ら「かもじ鹿の子、無變色無縮洗ひ」と叫び、腰には鈴を着けて市中を廻る殊勝さ誰しも感ぜぬ者はなしと、又同午后三時よりは、張籠を此れまた棒を以て擔ひ、「お茶は入りませぬか番茶は入りませぬか」と日暮るゝ迄で商ひ步行き、斯く迄でして夫の勞を助け、今は三人の我子にも人並に教育を受けさせ居るとなん、此婦の素志實に感ずべきにあらずや。

●三人比丘尼　富山縣上新川郡に三人の比丘尼あり、一は年二十、父の酒癖最も惡しく人の之を忌んで娶るものなきを思ひ尼となる、二は年十九、再び嫁して再び離らる大に之を耻とし髮を薙る、三は年十八、病を患へ歸ぐも契久しからざるを察し佛門に入る、惜しや盛りの花三輪。（東京日々新聞）。

●貞婦　新潟縣中蒲原郡石山村岡田彌惣治妻筒井みよは、稟性溫厚にして、明治三年彌惣治に嫁してより家政を一身に負擔し、孝貞の道を盡す、同十八年以來病父の看護に怠らず、傍ら農業に黽勉し、或は菜蔬を鬻ぎ、或は傭役に服し、其取得を以て病父の嗜好を進むる等、辛苦經營其志操八年一日の如く、鄉黨稱揚して措かず、實に奇特の至りなりとて、今回同縣廳より金三圓を下賜せられたりと。

●腕を剔いて養母の病を治す　出雲國松江市母衣町なる塚本信氏の妻きよ子は、現に松江高等小學校に裁縫教師を奉職し居り、年四十餘りなれど、孝順の譽れ高く信氏の母堂某（五十餘年）は先頃より極惡性ひようすに罹り、種々治療をなせど少しも其功を見ず、痛勢日に〳〵募るものから止むなく疾める右手の紅付指の中の節より切り捨て益々治療を加へし處、肉は漸次に付きたれど皮は中々出來兼ぬるより、きよ子は痛く之を憂て、去る六月十日五の朝自ら醫師某に請ふて、我左の腕を四け所迄割き斬らせ、其皮肉を養母のひようそに縫ひしかば、今は病氣も綏まり指の皮さへ生じたりと、而してきよ子は我腕の痛を堪へつゝ、日々出勤を怠らず、又た看護に餘念なしとぞ。

●女子實業會起らんとす　清水昌作、渡邊永綱、川田正徵、佐々木甲象等の諸氏土佐婦人の德育を進め佳良溫雅にして最も有用なる女子を養成するの目的を以て兼て市內本町に設立しある桑名瀧女史の一派と、過日來追手筋本願寺別院內に設けたる澁川いつ、高橋こう、清水いつ、萱野ゆき、上田みか等の諸女史の一派とを合併せしめ、更に土佐婦人實業會を起さんと既に會則等も編成なりしを以て、目下家屋借入に着手中なりと。

●米人カルヴヰン孃　は七月廿八日より共働者橋本氏及び女生七八名を伴ひて、筑後柳川に於て、傳道のために働かる、孃は全く日本人の生活をなし、起臥飮食皆な生徒と同一になし、或る時は茶漬を喫し、或時は菜食し、常に溫乎たる平和の姿容にて接するものをして覺へず感嘆せしむ、來會以來教會者を增し益

盛大に赴くの兆あり、孃は十月頃迄働かるゝ由。

●遊郭設置願　大分縣宇佐郡豐川村大字山本の原賴九郎外六名より同地下小路に遊郭を設置せんことを願ひ出たる由は豫て聞き及びたるなるが、去七日又ぞろ櫻町の住民橋本儀平氏外十一名より、仝町に遊郭設置致度旨の願書を差出したりと、尙ほ中津町にても右仝樣の願書を差し出したりと云ふ。(大分新聞)。

●女房の價十五錢　山口縣下阿武郡の某村にて、當時流行の紋紙と云へる者を催し、紋一を一錢五厘と、定め甲男は女房を賞品と爲せしに、乙男に當りしより泣く〳〵最愛の妻を引渡したりと云ふ。嗚呼是れ日本新聞に見ゆる所、吾人豈多言するに忍びんや、吾人は大に叫んで朝野の注意を喚起す。

●安藝津新報　七月十六日の同新報は、「宴會と藝妓」と題して、廣嶋縣知事鍋嶋幹氏の縣令乙第三十號(女學雜誌三百二十二號乙の卷參看)を賛し更に進んで「自今官吏たる者は、昇等、送迎、懇親の宴會に於て一切藝妓を聘せざらんことを誓ふの內規を設けられんことを希望す」と快論せり。

●三重縣通信

◎結婚　舊本縣尋常師範學校訓導にして、いま東京なる教育評論社に在社せる石川正作氏は、本縣尋常師範學校訓導三井よれ子と此程合歡の典を擧げられたり。

◎佐伯ひで子　さきに三重女學校を卒業して東京女子高等師範學校の小學師範科に入學せられしが、本年七月の卒業試驗にて目出度及第せられたり、因にいふ同女史は本縣尋常師範學校訓導となり、三井よれ子女史の後任を襲ふよし。

◎三重女學校につひての後報　同校はさきにも報道せしが如く維持の目途たゝざるをもて、漢學、習字、挿花などを教授する薄給のもの一二名を置き、他の學科は師範中學の兩校教諭の有志者が無報酬にて教授するの運びにいたりしを以て、閉校するが如き不幸を見ずして漸く相續するを得べきこととなりしにより、本月二十日より九月一日まで暑中休暇をなし、この間を以て完全なる維持法をたてんとの考なるよし、而してある保管委員の說には師範學校令によれば女子部を設くると云へることありて、若し他方經濟の之を設くるを許さゞることあれば、其事情を文部太臣に具申せよといふことあり、則ち女子部を設くるといへることが師範學校令の本躰なれば、知事も女子部を設くる意見を縣會に諮はざるべからず、而して女子教員の要不要は如何にと考ふれば小學教育に最も必要なることは言を待たず、然らば經費の點は如何にといふに、現在師範學校定員百五十名を百三十名に減じて、二十名を女子とするに男子の如く衣服を給するの必要もなく、食費も大に減じ得らるれば、反て女子部を設くる方地方經濟の點に於て利益なるところなり、然らば創業費目は如何にといふに、師範學校令にもあるが如く、その校舍は男子部と離隔せよといふにあり、もし此三重女學校を女子部として引きつゞくるを得るの場合にいたらんか、別に創業を要せざるのみならず設けざるを得ざる幼稚園も同校內にあり、これ好都合といふべし、されどかくなりせば今日三重女學校と其形軀を異にするにいたるべけれども、若し付屬とし教員志望のものゝみにあらざる女子をも養成することを得ば、實に僅少の費用を以て縣下女子教育の普及を圖る一擧兩得の策といふべし云々と。

●宮城縣通信

◎細谷なほ、大津よしゞの二女史は、仙臺東二番町高等小學校附屬幼稚園の保姆となられたり。

◎松操女學校の卒業式　は七月十六七兩日に執行せらる、卒業生は、高等科十八名、尋常科十四名、

高等科　山田よれ子(宮城)　小山みん子(同)　武田とみ子(同)　加川もろ子(山形)　佐藤かれ子(同)　大宮わくの(岩手)　平こま子(山形)　山中ふく子(宮城)　菅野ゑい子(同)　佐藤とり子(山形)　菅野みつ子(宮城)　松浦ふみを(同)　玉造すま子(山形)　高橋とみの(同)　穗積せい子(山形)　村木きれ子(北海道)　橫尾みつ子(宛城)

尋常科　菊地やす子(宮城)　齋藤そめ子(同)　飯田りつ子(同)　床司たけの(同)　安部よう子(同)　坂本との(同)　永澤みえ(同)　大內すほ子(同)　武田とみ子(同)　門馬うら(同)　小野じゆん(同)　菅野きみよ(岩手)　眞壁とよ子(宮城

●山陰道通信

◎松江市　嶋根縣尋常師範學校女子部には生徒四十名計にて、該校生徒服裝の一種特別なるは一目瞭然師範女生たるを知らしむ、髮は總て束髮にて「くつ」と「はかま」を穿ち擧動輕快自ら新體をなす。◎私立學校修道館には女生二十名計にて十六前名の令孃等が普通の教育を受く。◎外國女宣教師はミッセス、ボックストン、ミッセス、パアロット、ミスボックストン、ミスタムソン、ミスサンダー、ミスポーター等の諸氏にして、女傳導師平田きわ子氏、及び通譯神戶英和學校卒業鯛中八重子、梅花女學校卒業矢上歌子等の諸氏滯松して、何れも熱心に基督教の傳播に奔走せらる。◎市內女子の狀態は、一般に品格低くして華奢輕薄に流るゝものゝみ、近頃松下なる女佛教徒山陽より來松して頻りに各寺に於て佛教演說を開く、隨分を耳を傾むくるものなきに非ず、松江湖上今や佛耶兩徒の戰端多事なりと云ふべし。

◎鳥取英和女學校卒業式の景況　鳥取縣鳥取市東町なる同校にては六月廿五日午后二時より同校講堂に於て第二回卒業式を擧行せり、卒業生は田辻すが、岡垣とみ兩氏。

●高知縣通信

◎高知英和女學校第一回卒業式　は七月十二日午後四時同校新築の講堂に於て擧行せられたり、教員篠原方愛氏司會者となり、讃美歌を唱し、細川瀏氏の祈禱を以て式を始め、卒業生總代楠目まさ子勸迫の辭、生徒一同の唱歌(スヰートホーム)卒業生久武はるい子文章朗讀(文章論)卒業生入交とし子和文朗讀、生徒一同英語唱歌(ユーパイダ)、卒業生宮內かめぢ子英文朗讀(チーチユーア)、卒業生隅田

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

子和文朗讀、卒業生坂本みち子英詩諳誦（ロングフエローのソロム、チブ、ライフ）教頭スターリング孃卒業證を授け、卒業生に英語にて告別の辭を述べ、來賓植村正久氏の演說、四年生淡中ふじへ子の卒業生に告別の演說、來賓坂本直寛氏の演說、讃美歌二百四十九番を唱し、牧師吉岡弘毅氏の祝禱を以て式を終れり。

◎高知育兒會產婆學校　に於て本年は八名の卒業生を出だし、過日卒業證書授與式執行ありたり、卒業生を各郡に派出し實地に從事せしむる由、又た明治廿二年の卒業生國澤きよ子は山梨縣產婆教習所の招聘に應じ、先般當地を出發したり。

◎高知縣尋常師範學校　に於ては七月十九名卒業證書授與式を執行せられたり、卒業生男子廿八名にして、女子は十九名なり、其氏名左の如し、

足達　安　中島　里枝　上田　々鶴　北原　近
島崎　よし　伊藤　さら　武内　佐治衛　矢野　寅尾
森本　益惠　朝田　まつ　多田　ふみ　高橋　丑尾
桑山　要　森岡　しづ　北川　きん　前田　さら
齋田　龜尾　宮地　けい　大石　繁意

◎高知縣尋常中學校　に於ては七月廿五日卒業證書授與式を執行せられたり、男子部卒業生五十二名なり、女子部卒業生は二十名にして其氏名左の如し、

井上　喜代　入交　龜　花尾　近　嶋崎　春喜
仙頭　むろ　西内　久壽衛　久万　琴治　白石　德
東富　正枝　井上　鹿　生田　虎鬼　野本　政
西野　たつ　弘田　春猪　水戸　道　野田　鶴
廣瀬　たか　宮地　駒猪　松本　兎衛　森本　千賀衛

●長崎通信

◎梅ヶ崎女學校　は創立以來五ヶ年の星霜を經、本年六月二十日、始て第一回の卒業生五名を出せり、其姓名左の如し、

（佐賀縣人）武藤千代子（福岡縣人）安藤梢子（長崎縣人）高濱秋子（同縣人）吉岡時子（佐賀縣人）大庭こさら

因に云ふ同校は昨年九月齋藤氏校長の任を取られし以來着々改良の歩を進め、生徒も大に增加し、當今總數六拾名に登れり、來學期より嘗て下田歌子氏の門弟たりし原口きう子氏を聘して教員とし學科も幾分の改良をなせり、將來益々昌榮なるべし。

●熊本縣通信

◎熊本女學校卒業式　去る六月二十九日午后一時より熊本女學校に於て第一回卒業式を執行せり、卒業生は凡て五名にして山川鷹智子、森勝子は普通英語科卒業、片岡津屋子、緒方彌茂子、は邦語科卒業、上原春茂子は英語專修科卒業生なり、因に記す今度同校教員增田靜子氏職を辭して歸國せらるゝにより、以後森知勢子專ら教授の任に當らるゝ由。

◎熊本藥學校の女學生　同校は是迄女學生の入校を許し、既に今春の如きは三名の卒業生を出し、試業後新入學生募集の際は更に數名の入學生ありて、此等は多くは藥店或は醫師の子女なる由。

●賊婦女を掠す　支那廣東の邊、盜行なはるゝこと甚たし、屢〻良家に入り婦女を擄す、而して近來最も盛んなりと、悲むべきことにこそ。

●ピクトリヤ女皇　英皇ピクトリア陛下は米國シカゴに開設せる大博覽會に御親筆の油繪及水彩畵を出品せらるゝならむと。

●米國に於ける日本女生養成の計畫　此頃米國にて日本女學生を養成するを最も適當なりとて、適當の方法を設け給費生を募集せんとの議ボストン府に起れり、此擧たる費府に於ける「ブリンモーアカレージ」醫學校或は「ドトキスレール」職業學校等が若干の資金より來る歲入もて常に女學生を養成するの組織に倣はんとする者にて、近々其志願者を募集する都合なりと、今其給費女生取扱法を聞くに、其撰拔生になる者は、均しく教育熱心なる者にのみ限り、七人の日本學生取扱委員ありて、其一人は、此發企者たる日本婦人津田梅子孃にて、且つ其主任を兼れ居る由、故に其撰擧は一に梅子孃の手裡に存し、第一回推撰は在東京の適當なる委員に托して今秋是を擧行し、遲くも冬期には得撰者を見るに至らん、而して先づ初めは本科に入るの豫備を修養せしめ、順次適當の專門學科を卒へしむる手順なりと。

●伊國皇帝及皇后伯林行　伊國皇帝及皇后には獨逸皇帝御訪問の爲伯林に向ひ御出發あらせられしが、兩陛下には愈々去月廿日伯林に着御あり、獨逸皇帝及皇后竝に皇族方の大半は孰も出迎はせられ、最も慇懃に待遇あらせられたり、毎夕刊行の諸新聞は、盡く伊國皇帝及び皇后の御來遊を奉賀したる熱心なる記事を揭げ且同皇帝御來遊の結果として、獨伊兩帝國の同盟は益堅固なるべしと公言せり、此觀習二十一日伊國兩陛下のためにポツツダム戍兵の一大觀兵式を擧行せらる、此觀兵式に次ぎてウヰルヘルム皇帝にはマルガレツト皇妹とヘツセンのフリドリヒカル、公との間に御結婚の契約ありたる旨を御披露あらせらる、公は千八百六十八年を以て生れ、近衛騎兵第一聯隊大尉たり、而して皇妹は千八百七十二年の御誕生なり、翌二十二日獨伊兩皇后には御同伴にて伯林に還御あらせられ、非常なる歡迎を受けさせられ、路傍に充塞せる拜觀人の數は無慮數万なりと云ふ。

●昨年度合衆國に於ける計算によれば公立學校の教員の總數三十六万三千九百三十五人にして飲料品賣却商人の總數は二十万。四千九百十三人なりと。

●スコツトランドにては葡萄の發酵せざる者を用ゆる爲め互に一致和合したる教會は五百以上に登れりと云ふ。

●ミスエスハリエツトビーチヤストーは八十一才誕生の祝賀を六月十四日ハートフオルドなる宅にて擧行されたり同夫人は常に幼少の時より密接の關係を有せし人にあらざれば領承せざるの故を以て賓客の招待はなかりしも健全と喜を以て此祝賀を向へられたり當日其隣人に薔薇の一束を送りて祝意を表せしものありしが之に謝するの文に曰へらく「たどり」來し浮世の旅は長けれど親き友や情厚き隣

人等に纏はれて終に楽しく旅すらんと、嘗て伯父トムス、キャビンの新よ出版せる原稿の出版者たるバアートン、マイフリンに謝して曰くハートフォルドに於けるケドウイルクラブに屬する圖書館は當地の青年に利益を與へ以て善良なる事業を成就せしむる爲裨益する所多ければ數十卷を爰に寄送せんとを建言せりと云ふ。

THE GRADUATION CEREMONY OF THE "MEIJI JO-GAKKO."

THE fifth semi-annual graduation ceremony of the *Meiji Jo-Gakko* took place on the evening of the 19th instant in the hall of that seminary at Shimo-Rokubancho, Kojimachi-ku, Tokyo. Established eight years ago through the exertions of one lady, the late Mrs. Kimura Tô, who combined the best qualities of a genuine Japanese woman with the aspirations of the Christian creed, the school at once began a prosperous career and has since made steady, though unostentatious, progress, until it now occupies a unique position, not only among Japanese female schools, but in the wider sphere of general female education and social reform. The high rank attained by the school is no doubt in a large measure due to the zeal of the principal, Mr. Iwamoto Yoshiharu, a man scarcely thirty years of age, who has consecrated his life to the cause of female education and social reform. The *Jo-Gaku Zasshi* (Woman's Magazine), the first journal of the kind in Japan, is regarded as the organ of Mr. Iwamoto and his disciples of both sexes. The school is apparently conducted on strictly economical principles, and whenever its income from fees does not suffice it is indebted to the generous contributions of about a dozen Japanese Christians. The basis of education is strictly upon liberal Christian principles, but special care is taken to instruct the pupils in their national literature and history, as well as in English and all the useful branches of knowledge commonly taught in schools of the kind. There are two principal courses, the Higher and the Ordinary, the former extending over two years and the latter over three. To the Ordinary course are admitted only such girls as have passed through the higher primary school or attained a corresponding degree of proficiency; the Higher course is open only to graduates in the Ordinary course. Besides these courses, there are the Teacher's course, the Stenographic course, the Fencing course, and the Musical course. An Elective course is also provided for pupils of advanced age.

* * *

The ceremony commenced at a little past 7.30 p.m. The Principal, Mr. Iwamoto, briefly but clearly reviewed the past history and the present position of the school. He laid special stress upon the fact that, although Christianity is the basis of the education given in his school, religious propagandism does not constitute an object, nor is any preference shown to any particular denomination. The aim of the school, he declared, is to equip pupils for the duties which they will be called upon to discharge as wives and mothers. He claimed credit for endeavouring to avoid the extravagances of the extreme schools of thought on the subject of female education. His address was followed by singing and reading of essays. The latter were three in number, all in Japanese of really admirable excellence, the fair essayists being Miss Hara Mine, graduate of the Ordinary course, Miss Yoshioka Toshi, graduate of the Teachers' course, and Miss Hirose Tsune, graduate of Higher course. Then came performance on the *koto* by Misses Shijo Kane, Anayama Matsu, and Hidaka Mitsu, graduates of the Ordinary course. After these performances, diplomas and certificates were presented by the Principal to the graduated in the various courses; there being 3 in the Higher course, 27 in the Ordinary course, 6 in the Teachers' course, 3 in the Elective course, 7 in the Stenographic course, 11 in the Fencing course, and 4 in the Music course. The Principal then spoke a few words of advice to the happy recipients of diplomas; and Miss Matsui Man addressed them on behalf of the students. A valedictory address was then delivered by Miss Sakaki Natsu, graduate of the Higher course, who in touching terms thanked the members of the faculty for their unceasing zeal and kindness in teaching and guiding the pupils. After a recess of some ten minutes, the guests were treated to an interesting display of the pupils' skill in the use of halberds (*naginata*) and in the art of *yawara*. It is claimed for these exercises, as taught in the school, that they are highly beneficial, not only to the health of the pupils but to the steadying of their minds. So far as the use of the halberd is concerned, we entirely agree with Mr. Hoshino, the teacher of these exercises, as to its beneficial effects; but as to *yawara*, we are perplexed to understand how the study of sleight of hand can contribute to a young lady's useful accomplishments. A performance on the Satsuma *biwa*, connected with a stirring scene in the history of the heroic and loyal family of Kusunoki, by Mr. Yamashita Risuke, brought the evening's programme to a successful conclusion at a few minutes past 11 o'clock.

(Japan Daily Mail, July 23.)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學生夏期號外廣告至急購讀御申込あれ。

一休禪師は天知子の手に成る一休は乾質の非ず、一休は宗教界の俠客か、一休は厭世的宗教家に一休は入世の半可通なりと、分解評論、九ページ餘りの長篇をなす、その他**蘇東坡**は精緻の批評眼を有せる禿木子の手に成り、獨特**若夫れ雄**は山月子得意の筆其他二三の諸氏の筆を揮はる、一冊を机上に置かば、まさに暑熱の苦を忘るに足るべし。

●號外定價六錢● 女學生購讀者には、四錢にて配布す申込の諸君には、何人にても四錢に

十五日迄て賣却すべし、至急御申込あれ。

東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

吾黨之女子教育

巖本善治編

小形二百十七ページ
定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ	一
目下の女子教育法	一
何なか中正の旨義と云ふ	三十
女子教育に關する幾多の謬見	三十
女學及女子教育	五十四
母妻論	六十四
女學に反對する者の言論	八十四
日本女學讀本編纂	九十二
女禮と躰操	百
上躰操	百
下女禮	百五
女學校の裁縫科	百十二
塾舍に三の法あり	百二十二
武道の辨	百二十七
老母に代つて女學生へ苦情	百五十
細君内助の辨	百五十九
當今女子教育者の胸臆	百九十七
女學普及の經綸	二百〇七

明治女學校出版　女學雜誌社發賣

通信女學第三期生新募廣告

學問隆盛の今日、女學の進步一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉强をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆學問と云ふとに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬ、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も茲に入學して日々の進步目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學するとも出來ず又家に敎師を引て敎を受るも甚はだ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨及一昨年、一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學び得る便を供へたるが、其十二月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの八百餘名あり。然るに、去年一日申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

敎授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學（衛生、育兒、看病と合す）裁縫、圖入地理、英學。

敎師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、吉田仲子、渡邊辰五郎諸氏其他重もに明治女學校の敎員諸君に委賴し、專ら深切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢（無郵稅）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目錄

書名	著者	冊數	正價	郵税
文法口授	鈴木弘恭大人述	全	金拾二錢	金二錢
邦文學	松山高吉君著	全	金二拾錢	無郵税
雅俗諸體 作文口授	鈴木弘恭大人述	全	金二拾五錢	金四錢
徒然草講義	同 講述	一	金八錢	金二錢
標注參考 徒然草拔萃	同 標注著述	全	金貳十錢	金四錢
標注參考 竹取物語讀本	同 著述	全	金貳拾錢	金四錢
標注參考 土佐日記讀本	同 著述	全	金二十錢	金四錢
女學校用讀本 國文抄讀	同 著	五册	一册 金二拾二錢宛	一册 郵税金四錢宛
淺瀨の波	池袋清風大人著	二册	金三拾錢	金四錢
明治女小學躾草	松田敏足君著述	上下	金四拾錢	金六錢
記事祝文 女子文例	香月恕經君著 本村熊二君著	全	金二拾二錢	金四錢
漢文抄讀	横山雅男君著	四册	一册 金二拾四錢宛	一册 郵税金四錢宛
婚姻論	船越鼎太郎君著	全	金十六錢	金四錢
產婦小兒 攝生法		全	金十錢	金二錢

書名	著者	冊數	正價	郵税
母のつとめ	三島通良君著	母の巻 子の巻	金七十錢	金六十錢
兒育草	女學雜誌社編輯	全	金二拾錢	無郵税
女子生理	同 編輯	全	金二十五錢	無郵税
子供のはなし	同 編輯	全	金五錢	金二錢
家政要旨	村木經策君述	全	金五錢	金二錢
家計簿記法	藤尾錄郎君著	全	金二十錢	金四錢
束髮案内	渡邊鼎君著	全	金五錢	金二錢
女學叢書 木村鐐子傳	巖本善治君著	全	金八錢	金二錢
貧兒の教育	安東松治郎君著	全	金六錢	金二錢
訓蒙給双紙 猫と鼠	井上藤平君編	全	金五錢	金二錢
看護婦美談	久野正香君著	全	金貳拾五錢	金六錢
吾黨の女子教育	巖本善治君著	全	金拾錢	無郵税
日本女禮式	坪谷善四郎君著	全	金五十錢	金十二錢
かな習字帖	小野鐧之助君編	三册	一册 金拾錢宛	一册 郵税金二錢宛
文かきふり	同 編	二册	金三十六錢	金六錢

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

子宮神藥

子宮病より發する下腹病。胸痛頭痛。眩暈〻立くらみ氣欝。疳氣募り故なく悲しく涙出物事氣にかゝりて眠れず俗に疳と血の道と云ふ病には服藥して必らず治す又白血。長血。月經痛。或は産前産後の病に即効あり小兒欲き人は早く用ゆべし

貴芳水

大壜十錢 小壜五錢

色を白くし肌膚を緻密にし顔手足の艶を光澤するの一大特効藥にして貴婦人かたの白粉下に用ゆれば白粉鉛毒を防ぐの藥力ありされば。ひゞ。あかぎれ。しもやけ。は一夜にて不思議の効を奏す常に用ゆれば汗疹。彩刺そばかす。たゞれ等の患ひなし貴女の水は貴婦人慈善會に於て畏くも皇后陛下御買上の榮を得たり

東京四谷傳馬町一丁目十七番地

本舗 永田義原

特別賣捌店

東京上槙町 安川榮次郎
同 松村町 岩涙長藏
同 兩國廣小路 大木口哲
同 瀬戸物町、玉置金八
同 本石町四、森谷萬二郎
同 四谷御門外 大枝灰吹屋
同 麴町十三丁目 中島甚助
同 所 河合治兵衛
同 麴町六丁目 中島又兵衛

神田小川町 伊澤弘芳
坂本町角 德田多助
芝神明前 岩本新兵衛
牛込築土八幡町 尾澤辰助
牛込宮比町 尾澤豐太郎
本鄕五丁目 高島文藏
淺草菊屋橋 山田清兵衛
本所元町 林忠藏
銀座一丁目 佐々木玄兵衛

大阪四橋南詰 本林丁子屋
同堂島蜆橋 高橋盛大堂
下谷御徒士町 中島百之助
深川富岡門前町 小池佐兵衛
赤坂一ツ木町 伊藤吉兵衛
淺草西鳥越三 山田鶴吉
福島縣二本松 移川嘉藏
仙臺八幡町三 文字榮太郎
上州前橋本町 市川岩次郎

●元祖色を白くする

三能志やぼん

理化學的應用

實効確證

一個十錢

●抑も此の三能しやぼんは第一身体の色を白し御顔等の艶を出し肌のしみ、にきび、そばかす、をとり御肌合を艶美ならしむと奇々妙々なり

○尚くはしき事は本能書にあり

東京銀坐一丁目

●發賣本舗 佐々木玄兵衛

電話番號四百七十二番

●各地ノ藥店並ニ小間物店ニ取次販賣セリ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下 御覽濟の書

巖本善治妻 譯

再版 小公子

（リツトルロード。フオントルロイ）

小供のよみ本

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遙する幼見が、幹のくねり、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、かあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネィ、と申たとか。考えて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ等の者をくねらせる程、無情なとは實に稀で御座り升。邪道に陷らふとする父の足をとゝめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の德を思ひ起させるは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼見に限ります。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者故此珍重すべきまろうどを倘一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に轟き渡り、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髮の老者も心頑なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且倘ほ劇に演しても非常の喝采を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十貢密書十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。一冊正價三十八錢○郵税八錢也

（批評）○十一月十五日讀賣新聞○經濟雜誌五百九十八號○巖谷季雄君○十一月十三日報知新聞○十一月十七日中央新聞○早稲田文學四號○國民の友百卅八號○十一月廿六日國民新聞○十一月十七日中正日報○亞細亞廿二號○護教廿二號○下田歌子君○中島俊子君○石橋忍月君○十一月十六日自由新聞　女學雜誌社

加藤懋君
桂弼市君 同編

農商務省農務局藏版

重修 牧牛手引草

全壹冊 正價金五十五錢 郵税金四錢

本書は歐米牧牛の要領を掲けたるものにして即ち種類年齡躰格の鑑定より牛舍の搆造、飼養交尾、其他都て管理に屬する事及ひ搾乳製乳、病治療の方法等牧牛に關する一切の事項を細說せる良書なり

米國 改良種畜類

印刷實費金四拾五錢 郵便税金四錢

右は農科大學教授農學士米國理學士**玉利喜造氏**が米國留學中該國に於て最も有名なる良權を所有する牧畜家及家禽家に請ふて其純良なる**家禽家畜の鮮明なる寫生銅版**を求め編輯して一冊子と成し加ふるに畜產上に關して同氏が嶄新の說と適切の論とを以てし**我牧畜家の方針**を示すもの尠からず爰に氏は我牧畜界の爲め廣く之を傳播して聊か公益を謀らんとの主意より**印刷實費**のみを徵して有志の士に頒たれたるが今般其**殘册**扱方を弊社に囑托せられたり弊社其擧の美なるを賛し奮つて其勞を取らんとす御要望の諸君は**至急**御申越被下度候

取扱所 東京日本橋區呉服町三拾二番地 牧畜雜誌社

東京英和女學校學生募集廣告

一本校は來る九月六日より開く
一地位高燥空氣新鮮にして閑雅の風趣蓋し都下に冠たり
一校舍も潔く用水殊に清し建築亦頗る健康に適す
一目的廣く日本女子の爲め基督敎の主義に基きて高等なる普通敎育を授く
一學課　普通學部を分ちて本科別科の二となし別科は撰科として業を授く
一職業部　日本女子の爲に最有用なる職業を授く
一音樂部　ピアノ　オルガン　琴
一敎師　外人四名　本邦人十四名
一校醫　定時必ず來診す
一書籍室　東西の雜書及ひ新聞雜誌を備ふ
一寄宿舍　老練誠實なる內外國婦人數名を以て取締となし監督の責に任す
一來る九月六日午前九時より入學試驗を行ふ
學課等詳細の事は載せて本校規則にあり御入用の諸君は郵劵二錢御送附あれ

東京市赤坂區青山北町
東京英和女學校

入學志願者ハ齡廿二年已上普通敎育アリ身躰健全品行方正ナル婦女ニシテ九月十日迄ニ申込アレ但在學ハ二年間學資ハ食費而已ニシテ授業料ヲ要セズ規則書入用ノ方ハ貳錢切手ヲ送付アレ

京都烏丸上長者町
京都看病婦學校

林學士　星野愼之輔君著
昆蟲
植物
金石
採集法
小形洋綴美本
正價金八錢
郵稅金二錢
發賣元　女學雜誌社

三版出來せり
女學雜誌社

敎育ハ社會ノ改進ト倶ニ進步セザル可ラズ本校設置以來茲ニ十七年其間幾多ノ改良ヲ施シ以テ父兄諸君ノ信用ヲ空ウセズ來學ノ令孃實ニ數十百人ノ多キニ及ベリ本年ノ如キ高等科一名本科十二名豫科七名ノ卒業生ヲ得タリ今般內外ノ敎科書授業法ヲ始トシ其他校則等大ニ改良ヲ施シ專ラ勉强ト親切トヲ以テ益々女子敎育ニ從事セント欲ス世ノ令孃幸ニ來リ學ベ
●入學試驗九月五六日　○學年始九月七日
規則書入用ノ諸君ハ御通知次第直ニ呈送ス可シ

橫濱山手百七十八番
フェリス和英女學校

●女學生募集

本會ハ會員少女撰修手藝ノ四科中ニテ普通高等女學志願者ハ勿論既婚晩學ニテ充分修學ノ暇ナキ婦女ヘモ適宜ノ學藝ヲ授ケ賢才良母ノ養成ヲ期ス●外國人三名內國人十名ノ專門敎員各科ヲ擔任ス●豫備前期新募ス以上高等科迄缺員アリ●志願者ハ九月八日迄ニ申込ベシ

大阪道修町貳丁目
大阪婦人學習會

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第三百廿四號（明治廿五年三月十五日遞信省認可）明治廿五年八月六日發兌

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢　郵稅四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ／＼多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて百人一首それ／＼の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

發兌元　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目	瑞穗屋卯三郎
同錦町二丁目	武藏屋藤藏
同尾張町二丁目	東海堂
同彌左衛門町	巖々堂
同表神保町	東京堂
同出雲町	警醒社
同鐵砲町	指金堂
同元富士町	盛春堂
同雉子町	團々社
福岡縣福岡	積善館支店
神奈川縣橫濱市	共同新聞發賣會社
同　同	万字堂
京都佛光寺烏丸	東枝律書店
同新町竹屋町	便利堂
大坂本町四丁目	岡島支店
同	福音社
神戸元町四丁目	福音社
函館市	福音社
熊本縣熊本	草野門平
京都新町二條	大黑屋書店

女學雜誌市內賣捌店

麴町區上六番町	日盛堂
同三番町	梅仙堂
同同	福音舍
同飯田町	三文字屋
同同	洗心堂
神田區神保町	松江堂
同同	青柳堂
同雉子町	大塚書籍店
牛込區神樂町	積吉堂
同同	正導舍
同肴町	深田彌兵衛
本郷區弓町	文字堂
同同	就本堂
同富士前町	解明堂
同同	盛春堂
同二丁目	古河屋
下谷區東黑門町	三一堂
神田區松岡町	山口次郎
同旅籠町一丁目	槇本
同鍋町	清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目	庭花堂
芝區櫻田本鄉町	鈴木新兵衛
同南佐久間町	栗原
同同	鈴木
赤坂區新町	赤川市兵衛
同同	飯田
京橋區尾張町	鈴々木
同出雲町	金盛堂
同	山田屋
本鄉區天神町	吹進堂
神田區小川町	大塚雜誌店
同錦町二丁目	長故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

女學雜誌第三百二十號より改正仕り同號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も亦改正致度候間舊號迄の**雜誌代金**至急御拂込相成度候。爲替は**麴町郵便局**へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增の事

一雜誌及ひ書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊 金六錢　郵稅 金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金	拾錢
同	三回以上	一割引	
同	六回以上	二割引	

○十行以上一割引。二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增と定む。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY